きりすと教一班

小林光政著

特.61 267

小林光茂著

手と教一班

緒言

回顧すれは余が基督教哲學の編著に着手せしは實に一昨年暮にてありき漸く神の實在並に天地創造論の教義を論じ了り此に一段落を告けたれは其第一篇を發刊するの機既に熟せるもの丶如し頃者偶〻謂へらく哲學は後なり事實は先なり宜しく先づ余の所謂基督教の事實なるものを指摘し以て哲學の因て向ふ所を明にすへきなりと

去年十月我駒込教會に於て連夜演說會を開くに當り余は基督教一班と題し自ら先つ基督教の梗概を演したり踵て再たび之を築地教會に於て說きしが近頃に至り更に謂へらく此稿を脩正增補せば余が信する基督教の主要なる事實を網羅し得へく且つ後に來るへきもの丶先驅たるに適

するなき乎と乃ち試に筆を下して之れが脩補に日子を費すこと月餘而して遂に此稿を得たり文辭拙劣眼識淺陋固より識者の覽閲に供するの價あるにあらずと雖ども亦以て未だ全く基督教の要理を領會せずして疑雲怪霧の中に彷徨する人の爲に一穗の燈光と爲すに足らんか之に加ふるに諸友の勸誘措かざるものあり是れ余が不肖敢て辭さず此に發刊を決定したる所以なり

本篇は概して其基礎を北米加奈陀なるヴクトリア大學に於ける二三の神學講義に取りて起草せるものなり而して其基督教の起原なる一篇は余が近日「眞理の叢」に出せるものなり

余は今此緒言を叙するに當り余の請托を納れて本篇の脩辭上に貴重なる幫助を與へられたる小澤孫太郎龍居頼三兩君に謝する所なくんばあらず

明治廿七年一月

著者識

基督教一斑

目次

第一　基督教の起原……三
第二　基督教の特性……四十一
第三　基督教の感化……八十八
第四　基督教現今の大勢……百五
第五　結論……百十五

基督教一斑

小林光茂著

我は福音を恥とせず此福音はユダヤ人を始めギリシヤ人凡て信ずる者を救んとの神の大能なり我はギリシヤ人及び異邦人又た智人及び愚人にも負へる所あり是故に我力を盡しても福音を爾曹ロマに在る人々にも傳へんことを願ふ

基督教一斑

とは西暦紀元六十年頃其時代に於ける全世界の首都たりし羅馬に向ひ彼れ使徒保羅(パウロ)が懷ける傳道の精神を吐露せし言辭なり、彼が社會の嘲笑迫害を被むれるにも係らず福音の道を恥とせず智人にも愚人にも希臘人にも異邦人に

も諄々として之を說きし所以の者は他なし彼が基督の福音を以て萬民を救ふ所の神の大能なりと信じたればなり、蓋し我邦今日の基督信徒が社會の論難攻擊を招くにも拘らず曾て一日も傳道の事を忽にせざる所以のものは亦是れ保羅と同じく其福音を以て帝國を救ふ所の神の大能なりと信すればなり、而して我邦今日の社會が吾人基督信徒を非難するは猶使徒保羅が未だ信仰の眞意を解せざりし以前に於て基督信徒を攻擊せしと仝一轍に出つ畢竟未だ福音の眞相を看破せざる所あるが爲めなり、若し夫れ一旦釋然として道の本領を悟ることあらば飜然其基督敎に對する感情與論を一變するに至ること亦保羅の如く然り是れ我邦の社會に向つて吾人が私かに懷抱する所の信用なり、

今余が茲に基督敎の一斑を論じ其梗概を擧げて基督敎の實相を描寫せんことを發意したるもの亦是等の信仰に基因せるなり

余は先づ第一に基督敎の起原なる問題に入らん

第一　基督敎の起原

一條の河水漫々として流れ來れば忽ち源泉の何處に在るやを問はんことを欲し奏樂の喇喨として耳朶に響けば其伶人の誰たるを知らんことを望む斯の如きは是れ理性の欲望にして吾人の抑ゆべからざる性情なり、今吾人は此理性の欲望に逼られて基督敎の起原を探求するとゝはなれり、即ち日本文の聖書日本の基督敎會として吾人の目前に流

れ來る基督教の長流は其淵源何れにあるかを探見せんと欲す、而して多言を須ゐずして歐米より流れ來れること分明なれは吾人は先づ歐米の歴史に徴して其源泉を搜索すべし、

偖歐米に於て基督教の名が大に國史の上に載りしは羅馬帝コンスタンチンが基督教を以て國教と定めたる事跡に始まれるとなれば吾人は直ちに千五百有余年の古に遡り基督教の起原を羅馬の古史に尋ぬるとゝなりぬ、然れ共其古史は基督教の誕生を吾人に告ずして唯基督教の大羅馬を征服せし事跡を物語るのみなれば余輩は更に遠く遡て基泉源を探らざるを得ず、今試に吾人はコンスタンチン帝より更に百年を遡りて之を考ふるに歐羅巴、亞細亞、亞弗利加

ともに數多の教堂を有し、隆んなる神學校大なる神學者を有せしこと明かなり即ちアレキサンドリアの神學校に於てはクレメントオリヂン等の如き碩學踵を接して起り隆んに基督教と希臘の文物の關係を證論するを見る又西方亞弗利加のテリチュリアンガウルのアイリニヤスの如き皆當時の鏘々たる基督教々師にして基督教の神より出たることを論辨せり、彼等が新約聖書を閲讀したること其著書中に四福音書を引用して其著者の誰たることを擧げたるに由り明かなり而して彼等は新約書中五六を除くの外之を正統の聖書として尊敬せしなり吾人が今日新約聖書の眞僞を論ずるは主として彼等の證言に基づけるものなり、彼等の手に著されたる基督教神學に關する文書其數擧げ

て數ふべからず是れ實に今より殆んど千七百年以前の事なりき、此に於て更らに二百年を遡り今より千九百年以前オーガスタスの時世を鑒みるに當時は文學興隆の世にてシセロ、プルヂル、ホーラス、リヴヒーの如き文學者之れありと雖も吾人は其著書中一も基督教について論せし所あるを見ず、仍つて試みに百五十年を下り今より千七百五十年前を回顧すれば羅馬の版圖中ガウルにもイタリーにも希臘カルテージアレキサンドリア、アンテオケ皆基督教徒の足跡至らざる所なし、是を以て吾人は明知せり基督教が今を距ること千七百五十年乃至千九百年までの間即ち百五十年間に於て世に生出せしことを

然れども紀元百五十年に於けるヂアスチン、マルテル、百三

十年に於けるパピアス等が基督教と猶太教或は基督教と異邦人の關係に就き辨論せる所の文字今日に殘れり、且つ吾人は新約聖書に就き彼等の証論せる所甚だ多きを見る、

又ヂアスチンマルテルハ、八十歳乃至九十歳に達せる老人にして幼時より基督信徒たる者彼の時代に生存せることを其著書中に錄せり、是に依て之れを觀るに紀元七八十年の頃即ち今より千八百二十年前に既に基督教の世に存在せしこと疑ふべからざる事實なり、更に又ポリカープ、イグヂシアスバルナバ並に羅馬のクレメント等は第一世紀の終より第二世紀の初めに當り基督一生の事績を記し又新約聖書の一半に就き評論せる所ありたり、且つ同時代に於ける羅馬の歴史家タシタスは紀元六十六七年同國の帝王ニ

ヽガ大に基督教徒を迫害せし事績を叙述し尚は基督教の猶太より起りて羅馬に蔓延せしことを明かに記載せり、又吾人の有する新約聖書の原書なるものも其一半は第一世紀中紀元七十年以前に成れることゝ何人も承認せざるを得ざる所とす、是等の事に憑り吾人は基督教の起原につき公明なる判斷を下すことを得るを信ず、即ち其所謂基督教の源泉なるものは實に今より千八百五十余年前亞細亞の一小國猶太に於て開きしことの明確なる事實たるを斷定せざるを得ず、蓋し新約聖書の成立も基督教會の設立も基督信徒なる名稱の起原も皆早く此時になせり吾人は今斯の如く基督教原泉の所在に到着したれば宛然行程万里其希望の地に達せし如き感懷なき能はず然れども初め吾人を

驅て此處に至らしめたる理性の欲望は更に又吾人を驅て其所謂基督教の泉流なるものは如何にして湧き出たるかを探究せしむ此を以て吾人は復た是れが探究の程に上らさるを得ず

偖紀元四五十年頃既に基督信徒なるもの多く世に出たることゝ事實なるに於ては彼等は如何にして基督信徒となりしや、基督教なるもの如何にして猶太に生れしや是れ亦問はざるべからざることゝなり教祖なくして世に成り立ちし宗教なきに非ずと雖も是等は其以前に存在せる宗教の漸次進化せるものにて例へば印度のブラマニズム並に埃及希臘及び羅馬の古代の宗教の如し然れども基督教は大に是等と趣を異にし佛教、マホメット教及びゾロアスター教

の如く一定の時に當り突然世に起り來れる宗教なれば一人の教祖に依りて世に生れしこと明白なり若夫れ基督教が第一世紀の中半に於て基督を教祖となして猶太より起り間もなく羅馬の全天下に波及せしこと又基督の教訓事業が其門徒等の手に成りたる新約書の殼皮に包まれて四方に傳り基督教の本体となりしこと等の事實にして信じ得べからずとせば人間界の歴史中吾人は如何なることをも信じ得べからざるなり

今より凡そ千八百二十年前即ち紀元七八十年頃に於て前に擧げたるポリカープイグナーシアスバルナバ等の時代に生存せし基督信徒中には基督の直接なる弟子にして「我儕が聞きまた目は見懇切に觀わが手捫りし者」と基督を呼び得る者多く生存せしに相違なし基督と同時に生れたりし者も此時八十歳許の年齢を保つに過ぎず、又紀元六十年頃保羅の如きは彼得約翰の如き基督の使徒等と互に往來せしことと明白なる事實なり彼等の時代に於ては敵も味方も基督の事績を承認せることとなりき唯敵味方の區別は基督の事蹟に就き其眞正なる意味を了解せるとと了解せざりしとに在るのみなり

使徒及び保羅等は實に左の如く宣べて基督を傳へたり

「夫れヨハネの宣しバプテスマの後ガリラヤより始りユダヤ中に有し事は爾曹が知ところ即ち此ナザレより出たるイエスは神より聖靈と才能を以て膏を沃がれ周遊して善事を行ひ凡て惡魔に憑たる者を愈せり蓋神われと

僧なりしに因る」

以上述ぶる所に據り之を考ふるに基督教の起原なるものは歴史的の事實なる基督の言行に在りしことと吾人の疑ふ能はざる所なり「基督は純乎たる人間にして吾人と同樣に活き又動きたる者なりしが弟子等の作説に因り彼は神の子となれり」なる或人の想像は吾人の信を置くに足らぬ説なり如何となれば論者の謂ふが如く人なる基督が神となされたるとありたらんには必ず紀元卅年より八十年に至る五十年間に在りしとならん然れども其五十年間は前に云へる如く敵も味方も基督を親睹せし證見人の時代なり故に吾人は決して使徒等が作説を以て其敵を欺き基督の神の子たるを信ぜしめしことを想像す可らざればなり

今日基督教の起原を論ずるもの凡そ三種あり即ち一は日耳曼の神學者バウルスの道理論、二は同國チュービンゲン大學の創立者バウルの發育論、三は其徒弟ストラウスの小説論是れなり

第一バウルスの道理論は福音書なる基督の傳記を眞實なる歴史として承認し其中に錄されたる所の三十余の奇蹟を自然界の事實として説明するものなり例へは基督降誕の夕博士を東方よりベッレヘムに導きし天の星は流星或は遠方にありし路上の火光なりしならん又た基督が水上を徒歩せしとの事跡は湖邊を歩みたるを使徒等の誤認せしものならんなどの如く奇蹟を以て使徒等の誤認迷信に出たるものとなすこと是なり斯の如き想像説豈能く福音

書中の奇蹟を說明し盡すべけんや夫れ電光暴風雲霧及び夢等の如きものが彼の想像せし如く恰も期するが如く約するが如く聚集會合して使徒等を欺き事を誤認せしめ福音書に錄されたる如き奇蹟の信仰を彼等の心に起さしめたりとは吾人の信じ得べからざること なり斯の如きことを事實として信ずるよりも寧ろ奇蹟を事實として信ずることの容易なるを感ぜざるを得ず宜なりストラウスが一笑を以てバウルスの道理論を罵倒し福音書若し眞實の歷史にてあれば吾人はキリストの生涯より決して奇蹟を除き去ることを能はずと斷言せしはシユライエルマハルはパウルスに繼で日耳曼國に起り單に道理を以てキリスト教の起原を說明し得べからざるこ

とを痛論せり本世紀の最初に於る神學世界は道理論の氷塊を以て充塡せられたる如き觀ありしかども今日は斯く宗教的感情の春陽を其中に看るに至れり而して神學の趨勢を此に至らしめたるものは主として氏の力なりとす

第二　パウルは福音書を以て其時世に於ける輿論衆望を一種の小說に作りたるものと見做せり然れども基督教は或人の思慮幻想より生れ出でたる小說と謂ふて可ならんや基督教果して思慮の產物たらんには吾人は其組織中に多くの順序法式を見出すべき理なり然るに基督教の組織は斯の如き思想の證跡を有せず甲乙二人來りて互に反對せる教理を其中より汲み取ることすら尙ほ能くすべき情態に留まるものなり且つ其時世に於ける輿論衆望がパウル

の想像せる如く相聚て一種の小說を組成する資材となるまでに互に一致結合の性質を有せりとは是れ豈容易に信じ得べきことならんや更に又基督教が當時の輿論衆望に投合せしとは事實に背馳せる妄想なり抑々基督教は希臘の哲學者に向ふて小兒の如く謙遜なれと敎へ猶太の宗敎家に對して基督の十字架を信せよと勸めたり是れ豈彼等の輿論に合するものならんや又基督は敎法師としては其風采國民の希望に背き豫言者としては奇蹟を行ふを以て大預言者たるの資格を欠き又猶太人の埃ち望みたる救主としては大に彼等の理想に反せしなり斯の如き基督を描寫するもの豈小說家の本望あらんや是れ吾人が基督敎の起原に就き

バウルの所見に同意する能はざる所以なり又

バウルは新約書中に論爭の書講和の書等の別を立て新約書を以て彼得黨と保羅黨との間に起れる諍鬪の結果なりと推測するも吾人は彼の謂ふ如き論戰の證跡を新約聖書中に見出すこと能はず且つバウルは彼得を初め使徒等が基督の中に在りし世界主義を領會するの明なかりしことを以て其論爭の原因となせども吾人は先づ第一に已を萬民の救主なりとして宣揚し基督の世界主義を使徒等が毫も會得し能はざりしことを想像すべからず要するにバウルの發育論は新約聖書の成立を論ずるものにして新約聖書以前に在りし基督敎の起原を論究するものに非ず

第三ストラウスは福音書に錄されたる基督傳を以て猶太人が基督をメッシア(救主)と信仰せしに由り基督の事情に

對照して舊約聖書中に散在せし所の小說を基督に附會せしものなることを想像せり例ば基督が五の麭麭と二の魚を以て五千人に食を與へたる事績は舊約書中モーセがアラビアの野に於て天より降れるマナを以てイスラヘル人を飽しめたる小說を基督に附會せしものなりとなすが如し

余輩はストラウスに問はざるべからず使徒等が諸種の小說を集め來りて活ける基督の人物を描寫し後世を欺き得たる所の其智慧は何處より來りしや又彼等が已の揑造せし基督を信じて熱心に彼を宣傳せしとは吾人の信用し得ることなるや又彼等の爲せし敎訓は吾人が新約聖書中に見るが如き高尙なる德敎ならんとは是又信用し得べきと

となる乎を畢竟吾人はストラウスの議論を以て基督敎の起原につき滿足なる說明を下せしものなりと思惟することを能はざるなり

ストラウスの謂ふか如く果して第一二世紀頃に於て何人か基督の如き人物を想像し其假想的人物に歷史上の人物事實を纏絡し一定の地理學上の關係を結び付け眞個の人間の如く活き動き語ることをなす者と爲したりしに後世の人之を以て眞個の人間と見做し崇敬するの餘此人物の爲めに死たも尙辭せざるに至れるもの之れを是れ基督敎の起原なりとするも此の如き假想說焉んぞ基督敎の長大なる活歷史を說明し得んや

假說其歷史上並に地理學上の關係より其人物の性行に至

るまで後世の人を欺き得て何人も其假想的たるを看破し能はざるほどの人物を揑造せし者第一二世記頃に之れありたりとするも是れ實に尋常一樣の人間にあらず必ず不可思議の大人物たりしこと明かなりパルケル曰く基督の如き人物を揑造する者は基督より大なる者ならざるべからずと斯の如く此假想說なるものは不可思議なる基督の人物を除き去らんとして却て不可思議なる他の一人物を造れるものと謂ざるべからず是豈基督敎の起原を說明せしものならんや古今に於ける宗敎上並に道德上の顯著なる運動は人物ありて來れるに非ずや遠く孔子釋迦マホメットは問ふまでもなく近く宗敎改革のルーテルを見るも其證迹赫々たり豈獨り基督敎の基督より出たることのみを非難するの理あらんや斯の如く基督敎の基督なる歷史上の人物より起り來れることと既に明かなれば余輩は更に進で基督の性行事業に就き探究する所なかる可らず余は先づ基督敎を信せざる第一世紀の歷史家に証言を求め以て基督の一生を觀察せんとす

前に擧げたる羅馬の歷史家タンタスは其古史第十五編四十四章に於てニロ帝の時起りし羅馬の大火を叙述せし末に錄して曰く

今日クリスチアン(基督信徒)なる名の下に普通に知られたる者の敎祖は基督なる者なり彼はテベリアの治世に於てユダヤの方伯ピラトの時罪人として磔刑に附せら

れたるものなり彼の無法なる異端は一時鎮壓せられたれども再興して其惡の生地なる猶太を超へ羅馬の都市全体に波及せりと

又猶太の歴史家ジョセハスは其猶太國史第十八卷三章三節に基督の事を叙せり曰く

人として彼を呼ぶこと正當なりとせば基督は賢人なり多くの驚くべき事を爲し又眞理を學ぶことを善となす者を集め是を教へたり而して多くの猶太人並に異邦人は彼に歸依せり彼は救主なり而して我黨の主たちたる人々の勸告に據りピラトは彼を十字架に釘したれども最初より彼に從へる者は彼を去らざりき彼は死後三日にして再び彼等に現はれたればなり神の預言者等彼に就

き又彼の名に由りて名づけられたる種族に就き許多の驚くべき事を預言しある如く其種族は今日尚は其跡を絶ざるなり

以上基督教に反對せる歴史家の証言に據るも基督教の教祖基督の性行に就き其一端を窺知し得る所あり是より更に歩武を進めて彼督教の教科書なる新約聖書につき基督の人物事業を探究せんとす然れども余は新約聖書に就き豫め一言せざるべからず吾人の信ずる所に據れば其新約聖書なるものは基督の死後四十年より遲くも六十年に至る間に大成せしものにして基督及び其使徒の傳記並に其の使徒より諸處の教會へ贈れる文書より成るものな
り

其基督の傳を錄せるものの之を福音書と稱す即ち馬太傳馬可傳路可傳約翰傳是れなり而して約翰傳を除き他の三福音書は紀元七十年羅馬帝のタイタスがエルサレム城を陷れし前既に或る形体を具へて存在せしこと其記事の性質言語の仕組並にヂアスチン、マーテル等の証言に憑り斑々之を明かにするを得るなりヂアスチンは第二世紀の最初(紀元百三年より百六十八年)の人なるに其時世に於て既に都市村落何れの處にも教會は主の日に備忘錄を誦みしことを記せり而して其所謂備忘錄なるものは基督の言行錄にして吾人の三福音書と同樣なる者なると其著書に引用する所を見て知るべし其備忘錄中より彼の引用せし語中に吾人は馬太傳十七章の十三馬可傳三章十六路可傳廿三

章四六の語を發見するなり加之約翰傳三章三五の語も確かに其中に在るが如し其他ヂアスチンは少くも保羅の書翰中羅馬書哥林多前書哥羅西帖撒羅尼迦後書並に希伯來書又約翰の默示錄を識りしこと明白なり

前に述たる如く第二世紀中に於て基督教は既に廣く四方に傳播せしを以て吾人は處々に基督教の聖書なるものを發見し得るなり

第一ペシトーと名づけられたるアラミヤ語(シリヤ語とカルデア語の混合)の聖經は第一世紀中に成れる最も古き經典にしてパレスタインの猶太人の有せしものなり是れ彼得後書約翰第二三書猶太書及び默示錄を欠くのみにて餘は毫も吾人の有する所の新約聖書と異なることなし

第二羅甸文の右聖經は北亞弗利加の經書にして雅各書彼得後書を欠くの外吾人の新約聖書と異なる所なし

第三アイリニヤスの代表せるガウルの教會の有する所の聖經は吾人の新約書中より雅各書約翰第三書彼得後書猶太書腓利門書を除けるものなり

第四モレトリアン聖經なるものは羅馬に在る教會の有せる經書にして雅各書彼得前後書約翰第三書希伯來書を欠くの外吾人の新約書と異なる所を見ず

第五シリアン經書なるものは約翰第二三書彼得後書猶太書及び默示錄を欠く

第六マルシアンの聖經と稱するものは路可傳及び保羅十書にして即ち加拉太哥林多前後二書羅馬書帖撒尼羅迦前

後二書以弗所書(ラオデキア書と稱せらる)哥羅西腓利比及び腓利門書なりマルシアンはヂアスチンと同時代の人にて保羅の書のみを信用したるものなり

右に擧げし所の諸教會の聖經に就き考察するも吾人は少なくも三福音書並にマルシヤンの所謂保羅の十書は第二世紀の最初に於て各處の教會が神聖なる基督教の經典として之を尊敬せしことを承認せざるへからず是等の書は正しく基督に直接せる使徒等の著作として許容せられしことをも承認せざるべからず然れども余は茲に新約書中如何なる懷疑論者も確實と認むる書冊を摘撮して立論の基礎となすべし即ち該の主唱者たるチュービンゲンのバウルも疑ひ能はざりし所の保羅の四大書翰につき基督の最

初の弟子は如何に基督教の本源たる基督を解釋せしかを論述すべし即ち保羅の四大書翰とは羅馬書哥林多前書全後書及び加拉太書是れなり使徒保羅は其初め基督教徒に取て尤も殘虐なる迫害者なりしかど一朝悔改めて基督の使徒となりし以來二十餘年間基督の爲めに忠勤せし者なり彼の悔改の事蹟は基督の死後凡そ七年即ち紀元四十年頃に起りたるものにて基督教の尤も大切なる證據なりと雖も余は基督教感化の條下に於て之を論ずべければ茲に之を畧し正しく彼の手に著されたる上記の四大書翰につき基督の最初の使徒は如何に彼を信仰せしかを論ずべし

余今其四大書翰中より保羅の言二三を抄出せん

イエスキリストの僕パウロ召れて使徒となり神の福音の爲めに選るこの福音は從前より其豫言者たちに托りて聖書に誓ひ給へるものにて其子われらの主イエスキリストを指て示せり彼は肉体に由ばダビデの裔より生れ聖善の靈性に由ば甦りしことによりて明かに神の子たること顯れたりわれら彼より恩惠と使徒の職を受くこれ其名の爲めに万國の人々をして信じ從はせんとなり　(羅馬書一章一より五まで)

われイエスキリストと彼の十字架に釘られし事の外は爾曹の中に在て何をも知まじと意を定めたり　(哥林多前書二章二)

爾曹は神に由てキリストイエスに在りイエスは神に立られて爾曹の智惠又義また聖また贖となり給へり　(仝

一〇三

われら自己の事を宣るに非ず唯キリストイエスのまたることと又われらイエスに由て爾曹の僕たることを宣るなり　(哥林多後書四章五)

爾曹は皆キリストイエスを信ずるによりて神の子となれり　(加拉太書三章廿六)

兄弟よ願くは我儕の主イエスキリストの恩なんぢらの靈と偕ならんことをアーメン　(仝上六章十八)

以上擧ぐる所の保羅の言により吾人は基督に對する保羅の智識又感情の如何よりしか其一端を知るに足るを信ず保羅及び基督の最初の使徒等は實に基督を神の子と信じ神の如く彼を崇拜せしことは是れ疑ふべからざる事實な

りき又彼基督の十字架に拯救の意味ありしことは並に其復活を確信せしことは更に次に掲ぐる所の彼の言によりて明かなり

兄弟よわれ前になんぢらに傳へし福音を今又爾曹につぐことは爾曹が受けしところ之によりて立ちし所なり我なんぢらに傳へしは我受けし所の事にて其第一は即ち聖書に應ひてキリスト我儕の罪の爲に死また聖書に應ひて葬られ第三日に甦りケパに現はれ後十二の弟子に現はれ給へることも也如此あらわれ給へるのち五百の兄弟の共に在るとき亦これに現はれ給へり其兄弟のうち多くは今なほ世に在り此後ヤコブに現はれ又すべての使徒に現はれ最後に月たらぬ者の如き我にも現はれ給

へりこの故に我も彼等も此の如く宣傳へ爾曹も亦かくの如く信せり　(哥林多前書十五章一より十まで)

斯の如く基督の十字架及び其復活は彼を初め使徒等の爲めに信仰の基礎傳道の根據たりしこと眞に疑ふべからざるの事實にして極端なる懷疑論者パウルストラウスも使徒等は確實は基督の復活を信せし事を疑ふ能はざりき

以上述ぶる所により最初の使徒等が如何に基督を了解せしかの一端を窺知せり今吾人は保羅の四大書につき使徒等の信條を數へ彼等の信仰の定形を構造すと假想せよ余は信ず其定形として出て來れるものは恐らくは余輩使徒信經として知る所のものと大差なかるべきを使徒信經なるものは第五六世紀の頃より今日に傳はれるものにして

實に左の如し

われは天地の造主能はざる所なき父なる神を信ず。われは其獨子われらの主イエスキリストを信ず。彼は聖靈によりてはらみし處女マリアより生れ。ポンテオピラトの時苦を受け十字架につけられ死して葬られ。三日目に死人の中より甦り。天に昇り能はざる所おき父なる神の右に坐し。彼所より生る人と死せし人とを裁判せんが爲めに來り玉はんを信ず。われは聖靈を信ず。われは聖公會聖徒の交。罪の赦。身体の甦。限りなき生命とを信ず。アーメン。

彼等基督の最初の使徒なりしもの實に斯の如き條目を信仰の骨子となし基督の仁愛を其筋肉となし以て宣教の大動作を起せり而して彼等の堅固なる信仰洪大なる愛心勇

敢なる希望は實に二千年後の今日尙ほ全世界の人心を震動するの勢力あるなり

夫れ彼等は如何にして是等の奇妙なる信條を作りしや彼等の愛心は何處より來りしや彼等の希望は如何にして生れしや抑亦彼等の宣敎に熱心なるは何に由るか

彼等は皆是を耶蘇基督に依て得たりと明言せり余は重ねて保羅の言を引て之を證明するの必要なきを知るなり、耶蘇基督は即ち基督敎の根源にして其敎訓其事業は基督敎の本体なること此に至て明瞭なり而して吾人若し新約聖書の他の部分殊に四福音を以て保羅の四大書と對照せば基督敎の根元につき吾人は更に明確なる智識を得るものなり保羅の四書翰を承認して他の書翰を拒否するの理

安くにあるか大に吾人の解せざる所なり又四福音書は基督の奇蹟を載するが故に信ずべからずとなすか焉んぞ知らん保羅の四大書は奇蹟中の奇蹟なる基督の甦生を以て明白なる事實となして叙述するを證するに余輩は新約聖書の全卷が基督敎を包藏するものたることを疑はざるなり

前に述べる如くパウルス、バウル及びストラウスの諸輩は新約聖書に錄されたる使徒等の信仰即ち基督を神の獨子と信じ其復活を明白の事實なりと確信せし所の彼等の信仰を以て事實の基礎なき空想と鑑定妄斷し基督を以て吾人と同等なる一個の人間なりと推判せり然しながら吾人は復活の一事に就き考ふるも是を以て使徒等の妄想迷夢

と見做すことを能はざるを知るなり此一事こそ實に彼等の確乎たる信仰にてありき保羅曰く

キリストもし甦らざりしならば我儕の宣るところ徒然また爾曹の信仰も徒然からん且つわれら神の爲に妄の證をする者とならん我儕神はキリストを甦らしたと證すればなりと(哥林多前書十五章十四十五)

是等の言に徵して按ずるも保羅並に基督に直接せる使徒等即ち彼等の目にて懇切に基督を觀彼等の手にて基督に捫りたる者が皆此一事を根據となして彼等の全き信仰を安きしたと明白なり偖彼等は斯の如く基督の復活を確信せしかども其初彼等は容易に之を信せざりき且つ之を信ずることを欲せざりき馬可傳十六章十四節に能く是を吾

人に証明するなり曰く

又其後十一の弟子の食し居る時に現れて彼等が信なき頑と其心の頑とを責め給へり是彼等イエスの甦り給ふ後其を見し者の言ふ所を信せざりし故なりと

使徒等が其初頑然悟らず斷然信仰を拒否せし事柄を終に確信するに至れるとは亦奇妙にあらずや解釋する者あり曰く彼等は基督の復活せしことを夢しに因ると然らば則ち彼等は思はず望まざりしことを夢しなり多數の使徒等が全時に全一の夢を見しなり又其夢が彼等の一生を貫ける確信となりしなり是れ豈信ずべき話ならんや又此幻夢說は基督の屍の失せし事實を說明することを能はざるなり更に又說を作す者あり曰く基督は一時氣息の閉塞せして

とありしのみにて弟子の考へし如く眞の死を嘗めしに非ずと此說に從ふ時は基督は只十字架上に於て氣絕せしのみなりき然るに彼は死者と誤認せられ葬られて後ち三日を經て墓より出現せり是れ亦吾人の容易に承認し難き說なり且つ論者の主義より考へ來れば基督は早晚眞に死せし者なり然らば余は問はざるを得ず基督は墓より出現して以來何年使徒等と共にありしや又基督は如何にして死せしやと縱令論者の見るが如く一時彼等は基督を誤認して復活の信仰を起せしとありしとするも基督の屍体を再び眼前に見るの日焉んぞ能く彼等の信仰を保持し得べけんや觀よ基督の復活に於ける基督敎會の信仰は終始一貫曾て變せず敎會は是に由て立ち是に賴て活き是に依て今

日存することを得るものなり吾人は基督の復活を以て公明なる歷史上の事實なりとなすの外到底他に使徒等の信仰を說明する道なきことを斷定せざるを得ざるなり

基督は神乎人乎の問題に至ては余今茲に論辯するの要なきを知る只保羅及び基督に直接せし使徒等は皆均しく基督を神の獨子なりと信じ神と等しく彼を崇拜せしことを記するを以て足れりとなす如何となれば縱令基督の客觀的に彼等の信せしが如き事をなさず又自ら彼等の信せしが如き者に非ずとなすも彼等をして斯く信せざるを得ざるに至らしめたるほどの事を爲し給へることを明かなり而して既に基督が彼等の信仰的事實の原因なることさへ明了なるを得ば基督敎の泉流の基督より湧き出たること既

源を今より千八百六十餘年前猶太の地に生活せしイエスキリストなる神人に發し流れて使徒等の傳道となり新約聖書の成立となり基督教會の設立となり其信條の由來と成り歐米の基督教となり又我邦に基督教となるを觀る

夫れ莊嚴華麗なる宇宙の大觀も其根原を索ぬれば炎々たる火雲の中に在りし斯の如く强壯善美なる基督教の活歴史も其本源に遡れば一人の教祖イエスキリスト耶蘇基督の性行に包まれ在りしなり愈〻現はれて愈〻奇なるもの吾人唯之を宇宙と基督教とに於て見るのみ

第二　基督教の特性

基督教の特性は即ち其教祖基督の特性なること以上論する所を以て推知するを得べし而して余は之を論ずるにも

に明々白々なればなり然れども使徒等が皆均しく生命の血を濺で確實を印せる彼等の信仰の事實は客觀的事實の基礎なき空想として說明し得るか彼等が剛膽なる大丈夫たることを得たるも道德世界の大人物たることを証したるも又忽ち羅馬の天下に勝利の旗を擧げたる彼等の勇しき傳道の成切も一として彼等の信仰に基因せざるはなし斯の如き信仰豈空想迷夢の結果なりと抹殺するを得べけんや余輩は基督教の公明正大なる活歴史を說明するに足る原因基督の中に存在すること を承認せざるを得ず即ち夫の使徒等が全き心を以て信仰せし所の事實は客觀的に基督の中に現存せしことを許容せざるを得ざるなり以上述ぶる所を概括すれば基督教の潮流なるものは其泉

亦公平なる方法に據り反對論者の承認せざるべからざる點より論入せんとす即ち先づフェルヂナンドバウルの許容せし所の基督教の四原素を論ずべし蓋し四原素とは第一世界念、第二靈性、第三純粹なる唯一神教、第四隱遁を旨とする人生の理想是れなり而して氏は是等の四原素を以て過去に於ける諸宗教の主要なる綱目たることを看破し又現在將來を通して是等が不朽の價値ある宗教の原理たることを洞見し以て之を基督教に蒐めたるは基督の力たることを明言せり又氏は是等の四原素に就き一々其出所を推測して說をなせり乃ち曰く世界なる思念は當時萬國を一統して立てる羅馬の都より感得せりと曰く其高尙なる靈性は其基礎を遠く「巳を知れ」なる希臘の倫理學に取れりと又曰く

其純粹なる唯一神教はアレキサンドリヤの哲學者フィローの解釋に基つける舊約聖書の唯一神教なり又其隱遁主義は猶太教のエッセニース宗派に淵源するものなりと偖氏は斯の如く基督の宗教思想を分拆して諸原素の出所を斷定すと雖も尙ほ自ら以て基督教の大活力を說明し得たりと謂はず此に於て又更に一種の想像を加へて曰く基督は古來猶太人の希望たるメッサイア(救主の意)の名に託して自巳の宗教を擴布したり是れ基督教の成功ありし所以なりと

余は是れより氏の摘撮せし所の四大原素に就き基督教の特性を論ずべし

第一　世界念(ユニヴァルサリチー)

基督教の世界念は是れ其特性の一なることバウルの言の如し基督自ら其宣教の範圍を播種に譬へて曰く「世界は畑なり」「播種者は人の子なり」と又終に臨み弟子に教へて曰く「偏く世界を廻りて凡の人に福音を宣傳よ」と

基督教は何れの國家何れの人種たるを問はず信する者は皆是を己の宗教となすに適する特質を有する宗教なり實に人の子なる基督の心は萬民を包み其教は萬國を蓋ふに足る者と謂ふへし而も其十全なる靈性は又よく各人の希望を滿足せしむるの力あり故に學者も來つて眞理の果を食ふべく詩人も來つて善美の清泉を汲むべく實業者も政治家も來て共に精神上の休憩を取るを得べし又東西の文明も基督に在て初めて調和の音樂を奏すべく黑白の人種

も基督に在て初めて平和の歌を謳ふべく異種の宗教も基督に在て初めて愛隣の談を始むべし

バウルは此基督教の特性を以て當時全世界の首府たる羅馬の都より感得せるものとすと雖も余は寧ろ之を以て純粹なる唯一神教より迸發たる泉源と想像するの至當なるを信ず

第二　靈性

基督の靈性は果して何處より來りしかについてバウルの想像は既に迷へりと雖も彼は基督教の高貴なる靈性を認めたり千八百有余年前の無知なるガリラヤ人も今日の慧敏なる獨逸の批評家も基督の中に完全なる靈性を認め善美の化身を眺むるに於ては一なり吾人の信仰時に疑惑の暴

風に吹かるゝとあるも總て其基礎の動かざる所以のもの實に此點に存す」

夫れ智に精しき者は情に疎く情に精しき者は智に疎し智と情を併有するものありとするも彼れ强健なる意志を欠く是れ吾人の常なり而るに獨り耶蘇基督に於ては三者何れの點より觀るも實に吾人の理想を現實せる者たるを知る試みに彼の智を見よ彼の心より湧出せる天國の敎訓は如何に大なる哲學を有し如何に尊嚴なる神威を有するぞ而して彼の之を說くや吾人が平生の事を談ずるか如く夫れ易々たり佛國のパスカル曰く

基督は最大の事神の事を坦々然として語るより見るも吾人は是等の者の彼の知己なり親友たるの感を起さゞ

るを得ず」と

是れ眞に吾人が四福音を讀下し基督の垂訓を味ふに當り特に感ずる所を言ひ顯はせしものなり

獨逸の詩人ゴーテ四福音の敎義を嘆稱して曰く

「智育は長に發達せん。科學の版圖は限りなく廣く其規模は限りなく深くならん又吾人の心も必らず大に開けん然れども德敎のみは如何に進步するも四福音に赫奕たる基督敎の光榮と德育とには超越し得べからじ」と

次に基督の情愛を見よ彼は其天國の福音を人に敎ゆるに當り儒者の經書を講ずるが如くならず又彼の希臘の哲學者が倫理の問答をなすが如くならずして恰も牝の雛を集むる如く牧者の已の羊を導く如く抑も亦慈母か手を取て

赤子に歩行を教ゆるが如くなせり悲む者と共に悲み喜ぶ者と共に喜び已を惡くむ者を善視し己に敵する者を愛し仁愛至らざるなく慈善盡さゞる所なかりき此に於て幼孩も不幸人も貧人も病客も稅吏も罪人も皆基督の知己友人となりて敢て憚る所なきに至れり是れ基督を信ずる者が彼を敬愛して今日も彼の爲めに死たも猶甘んずる所以なり

又基督の意志如何に强固なるかを見よ基督にして若し政權威力を利用せんと欲せしならば其機會は自ら彼の前に開かれたり然れども彼は政權威力よりも强きものを有せり又彼にして科學哲學の援助を要せしならば新プレトニストイツクも來りて基督の功業を翼けたるならん然れども彼は彼自身を以て足れりとなせり彼は己の手を以て凡て是等の銳利なる機器を破壞し只己の强固なる意志を恃みて毅然たりし

斯の如く高大なる智と濃密なる情と剛健なる意志とは基督の靈性にして是れ亦基督教の靈性なりカイム基督の靈性を描寫して曰く

衰枯の時代に在りて充實なる生命、荒廢の中央に在りて高閣、敗壞せる品性の間に處して端正剛氣、不處不義の間に處して神の子、悲哀絕望の間に處して滿悅多望、罪人の間に處して聖者、

此の如く彼は當時の事情と背馳せることに於て卑陋平凡の狀態に脫出して嶄然聳立することに於て、沈滯退步死

病を進歩健康勢力及び長生不老に轉化することに於て、其功業其聖潔其神に近きことの其時代の世人に超脫することに於て、又彼に由て沈滯退歩等より救はれたる諸時代にすら猶且つ超脫することに於て、吾人は彼の幽玄なる孤立人界に超然たる奇觀、特別なる被造者たることを感せざるを得ず」と

レナンも基督につき亦左の如く言へり

「彼は不朽の磐石たる眞宗教の基礎を設置せりされバて「そ彼は神位に當るなれ彼に依て無二の新思想は世界に入れり吾人は凡て彼の徒弟彼の血族なり」

夫れカイム、レナンは福音主義に反對せるものなり而るに基督の靈性につき各々其謂ふ處此の如し基督の顯著なる

靈性を有し給ふこと推して知るべきなり此靈性の基因を論ずるに當りパウルは之を遠くアテンスの倫理學に聯結せり是れ豈滿足なる說明ならんや「己を知れ」なる哲學基督の人物基督教の靈性を構成し來らんには該哲學を脩むる者凡て基督の有せる如き高貴なる靈性を具備すべき理なり然るに基督獨り其榮を專にするは如何是れ其哲理よりも大なるもの彼に在て存するの故に非らずして何そや既に是より大なるもの彼の中にありしとするか亦た故さらにアテンスの倫理學を引援し來りて之を聯結せしむるの必要なきなり吾人は單に基督教の靈性は基督の大人物より來り基督の大人物は彼の境遇の產物にあらざることを判定することの勝れるに若かざることを謂ふなり余は後段

に至り更に論せんと欲する所あれば此には基督教の靈性の起原に論及せさるべし

第三　純粋なる唯一神教

基督の吾人に教へ給ふ神は一部屬若くは一邦國の神に非すして万國万民の主なり而して其性質を論すれは全能全智至善至美なるものにして恐れ遠くへき鬼神にあらず却て愛して近くべき吾人の天の父なりパウルは基督教の此原素を猶太の舊約聖書より集め來りたるものとなせるも猶太人の拜するエホバは幾分か物質的並に部屬的の性質を帶ぶる者なりと考へしを以て故らにアレキサンドリアの哲學者フィローの解釋に基づけるエホバなることを想像せり然れども猶太人の拜するエホバは万國の神なるべ

きと預言者アモスの既に解釋せる所にして基督教の神なる觀念はフィローを俟て初めて成りしに非るなり

第四　隱遁を旨とする人生の理想

之を以て基督教の要素の一に加へたるは亦パウルの謬見と謂ふべし基督の生涯は決して隱遁の生涯に非ず獻身の生涯なり白雲深處の老僧は基督の以て人生の理想となせし所に非ず戰鬪攻守の衝に當り毅然として立ち奮然として勵む所の軍人兵士こそ基督の以て人生の理想となせしものなり夫れ隱遁も獻身も自制自戒を意味するに於ては同じ老僧も兵士も世事を以て自己を累はせざるに於ては相違する所なしと雖も兩者の神氣精神に至りては其懸隔する所天地も啻ならざるなり一は人生の困苦を避けて獨

醍醐樂を仙境に求め他は國民の辛苦を一身に荷ひ國家の安寧の爲めに生命を彈丸鋒鏑の間に委ぬ一は是れ身を消極的人生の海底に沈めたるもの他は是れ身を積極的人生の山頂に擧げたるものなり一は是れ一種の死人にして他は是れ活々たる一種の英傑なり基督が宗教上の修養を重んじ堅固なる操行を貴ぶはエッセニースの如くありたれどエッセニースの隱遁主義は基督の以て理想的人生となせし所にあらず基督の生涯及び道德は愛の發現にして獻身的なること保羅の言の如し保羅其四大書中に敎へて曰く

爾曹われらの主キリストの恩を知る彼は富る者なりしが爾曹の爲めに貧しき者となれり

それ義人の爲に死るもの殆ど少なり仁者の爲めには死ることを厭ざる者をや有んぬ然ど基督は我儕のなほ罪人たる時われらの爲に死たまへり

キリストは我儕の父なる神の旨に循ひ今の惡世より我儕を救出さんとて我儕の罪の爲に己が身を捨たまへり

基督の愛われらを勉せり

われら何處へ往にも常にイエスの死を身に負へり

我基督の爲に懦弱と凌辱と空乏と迫害と患難に遭を樂とせり

我キリストに在て神の前にいふ愛する者よ我儕の行ふ所は皆爾曹の德を建んが爲なり

我キリストに効ふ如く爾曹われに効ふべし

なんぢら目を醒し堅く信仰に立ちて丈夫の如く剛かれ
恒に勵みて主の工を務めよ

と是れ豈隱遁者の所見ならんやパウルの謬見たる亦た多辨を加へすして瞭然たり

次にパウル及ひストラウスが基督の已を猶太のメッシアに託して教を擴布せしことを承認せしは吾人の大に注目すへき點なり基督教の奇蹟を拒否する彼等にして之を許容するは自家撞着の說たるを免かれす請ふ少しく之を辨せん

パウルの信用せし使徒保羅曰く猶太人は奇蹟を求め希臘人は智慧を求むと猶太人は實に奇跡を求めたる民にてありき而して彼等がメッシアとして大能者の降臨を待ち望

みしも奇跡を以て彼等を救ふ大能者の右臂を仰望せしなり奇蹟は實にメッシアを鑑定する試驗石なりしなり故に猶太人が基督をメッシアとして承認せしこと果して事實なるに於ては基督は奇跡を行ひしか或は奇跡を行ひしと信せられたるに因るものなりストラウス曰く基督はメッシアと先づ信用せられし故に後より彼れは奇跡を行ひしと想像せられたるなりと然しながら其初めメッシアと信用せられんには必す異能奇跡の試驗石に觸れざるべからざりしこと明かなり故にパウルストラウスが基督の已をメッシアと呼びしことを承認するは奇跡を排斥する彼等の主義に矛盾せることを斷言せざるを得ず

吾人は信ず基督が已を眞のメッシアなりと公言し又猶太

人は其の如く彼を信せし如く彼はメッシアの心を有しメッシアの操行を脩め又眞に異蹟を行ひ人の罪を赦すメッシアの權能を有せしことを

以上余はパウルの觀察に基つき基督教の特性の二三を論じたるに過きず仍て更に吾人が認めて基督教の特有せる品性となすものに付き茲に之を加へ論せんとす

第五　基督教は尤もよく人性に適應すること

基督教は單に哲學者の冥想文學者の詩情を滿足せしむるのみならず無智無學の心よりも自然に啓發する人性を顧み其至情至望を滿足せしむるものなり

先づ第一に基督教の教ゆる神なる教義に徴して之を証すへし

基督教の神は吾人の贖で活きまた動き又存ることを得る所の天父にして、我儕各人を離るゝ遠からず、我坐るをも立をも歩むをも臥すをも皆能く知り給ふ所のものなり、前より後よりわれをかこみ其手吾を導き其右手吾を保ち給ふ、其目義人の上に留まり其耳義人の祈禱に傾く、日を善者にも惡者にも照し雨を義者にも不義者にも降せ給ふ、傷る葦を折ることなく煙れる麻を熄すことなく碎けたる悔し心を藐しめ給ふことなし、二羽の雀は一錢にて售るに非ずや然るに天の父の許なくば其一羽も地に隕ることなく我儕の頭の髮また皆數へらる、天空の鳥は稼ことなく穡ことなしと雖とも其養護を被むり野の百合花は勞ず紡がずと雖も光榮を與へらる、斯の如きは是れ基督教の吾人に教ふる神の攝理な

るものにて此攝理ある神こそ吾人の自然に渴望して已まざる所の者たるなり

第二基督教の說く所の人間なる敎義はよく吾人の運命價値を說明するに足るものにして吾人の身体は土の塵より成り吾人の心靈は神の生氣神の肖像なることを敎ゆるものなり夫れ吾人が動もすれば罪の結果の如く賤しむ所の肉体も是に於て初めて「神より享けたる聖靈の殿」なることを悟り朝露に譬へられ睡夢に像らるゝ人生も是に於て初めて其神聖尊嚴なる意味を學ぶことを得るものなり基督敎の吾人に與ふる本我、自己なる觀念は或る哲學者の解釋せる如く或る時は飲食の慾と成り或る時は寒暑の感となり又或る時は喜怒哀樂の情となるが如き千變万化して已まざる

ものゝ謂にあらず永久不變身死すとも死せず情感を制御し天理を保全し以て神の榮光を顯現せしむべき責任本分を荷ふものなり基督は吾々一個人の價格を明言して曰く「若し人全世界を得るとも其生命を失はゞ何の益あらん乎」また人何を以て其生命に易んや」と又基督は自ら尊貴なる人生の模範を殘し吾人に敎へて曰く「爾曹のうち大ならんと欲ふ者は爾曹に役るゝ者となるべしまた爾曹のうち首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし此の如く人の子の來るも人を役ふ爲には非す反て人に役はれ又多くの人に代て生命を予へ其贖とならん爲なり」と吾人は基督敎に於て人間の運命價値を認識するのみならず又其尤も譽れある人生の務とは他人の難難と辛苦とを一身に受け荷ひ敎

然として耐へ奮然として勵むとの謂ひなるを領會するものあり

第三基督教の所謂罪惡なるものは此世の不完全或は人生の艱苦等を謂ふものに非す吾人の意思を以て現に神の律法を蹂躙する實行或は凡て信仰と愛の趣旨に戻れる意思の働きを稱するものなり基督教は慾望其れ自身を以て罪なりとせず慾望を驅て邪惡の道に入らしむる意思を以て罪ありとなす而して此意思の働を以て犯したる罪惡は死の果を結ぶものなるとを教ゆ即ち肢体の死亡心靈の死亡是れなり此世の不完全又人生の艱苦なるものは必らずしも罪の結果にあらざるのみならず却て是れ我人に天王を贊くべき餘地を授け以て吾人の進歩を圖る神の攝理に出

てたるものとなす是を以て佛教或はゾロアスターの說ける罪の教義に比す其差異果して如何ぞや

第四基督教の拯救なる教義は神と吾人との媾和を意味するものにして吾人の尙は罪に沈溺し毫も心靈の拯救などに思ひ及はさる時神の既に是を備へ給ふ所なりしを說くものなり故に基督教の拯救なるものは其原と人より求め出したるものならで神より出たるものなり即ち神の愛より湧き出でたるものなり蓋し神が義人を近つけ罪人を遠け給ふとは何れの宗教に於ても說く所と雖も基督教は更に一歩を進め神が「豐厚なる仁慈と寬容なると恒忍たまふとを以て罪人を悔改に導き給ふとを教ゆ基督曰く「爾曹如何に意ふや人若し百匹の羊あらんに其一匹まよはゞ九十

九を山に置き往きて迷ひし一を尋ざる乎斯の如く人の子は喪ひし者を尋て救ん爲に來れり」と又曰く「爾曹迷へる羊を尋ねて之に遇は吾まことに爾曹に告けん迷はざる九十九の者よりも尚其一を喜ばん斯の如くこの小子の一人の亡るは天に在す爾曹の父の尊旨に非ず一人の罪ある人悔改めなば神の使の前に喜あるべし」と然れども基督教に說ける神の拯救は未た之を以て盡せるものに非ず神の吾人を憫み給ふは父の子を憫むが如く自ら万民の艱苦罪障を負ふて吾人を贖ひ出さんと欲す基督の犧牲的並に贖罪的生涯は實に之を現實する者にて基督の十字架並に復活はよく之を證明する者となす吾人若し基督の十字架を眺め其上に現はれたる神の慈愛を望み罪を悔ひ心を改めて祈

る時は吾人の心靈恰も美物に飽く如く活水を汲む如く新たに生まるゝ如く新たに活くるか如きを經驗す是れ基督教の所謂拯救なり而して此拯救なるものは一時の感覺に止まらず神の聖靈を以て印せらるゝ所の眞心にして慥かなる心を生し新正なる靈の生涯を作り神と偕に永遠に生存せんとするものなり是れ拯救の成全せるものなり

何人にても神、人、罪、拯救等の樞要なる教義に通曉する者は基督教のよく人性に適切なるを領會し得へし是等の教義は皆今生れし嬰兒の乳を慕ふ如く吾人の自然に渴望するものなり吾人の心是等の教義に應して飛躍するは猶羊が牧者の聲を識て之に從ふが如し基督曰く

彼已の比喩となせし牧者を指す)已の羊の名を呼て之を

引出す彼其羊を引出す時先に行くなり羊彼の聲を識て之に從ふ羊別の人に從はず反て避くそは別人の聲を識ざればなりと

第六　基督教は万國宗教の秀美を蒐むること

吾人今基督の時世に於ける宗教界を觀るに正統正式の神學を擴張するパリサイ宗あり自由神學を唱ふるサドカイ宗あり又エッセニースの頗る清教徒に類するものありて三派鼎立の勢なりし而るに基督は身を其間に處し三派の粹を合せて別に宗教界の一新機軸を出し何れの宗派にも偏僻せさりき是れ吾人の大に注意すべき一事なり夫れ基督はパリサイの如く甦生を信じ律法を重じたりと雖もパリサイ宗徒の如く禮法の奴隷とはならす彼等の形式を過重する弊風を叱責せしが爲め彼は終ゑ彼等の殺害する所となれり又基督はサドカイの如く現世を重じ意思の自由神の攝理を主張したるもサドカイ宗徒の如く永生の教義に疑惑するとなかりき彼はサドカイ宗徒の甦生を信せさりしとを以て神の能力と聖書とを解せざる彼等の不明を責めたり又基督は神と德と人とを愛する三愛を根とし純潔なる志操を幹とし祈禱默念を以て其根幹を涵養すると に於ては一にエッセニースの如くなりし然れとも其蟄伏主義を斥けたると余か既に論したる所の如し

更に又基督の時世に於ける哲學の傾向を按するゑ自愛を主張するエピキユリアンあり他愛を論するストイックあり又單に愛神をのみ說くプレトーの餘派ありて倫理學の

方針一定せざりし而して基督は已の如く爾の隣を愛せよなる一教訓の中に此三愛を合一せり是に依て之を觀れは他愛の爲に自愛を犧牲にするストイックの倫理と異なり自愛の爲に他愛を無するエピキユリアンならざると明かなり又「若し吾を愛するならば我誡を守れ此いと微き者に為すは即ち吾になすなり」なる語に依りて已の如く他を愛するは神を愛し基督を愛するとなるを明にせり是れ自他の兩愛を犧牲にして神のみを愛することを說くプレトーの倫理と其趣を異にせり斯の如く基督は一種エピキユリアンにも非ずストイックにも非ず又プレトーにも非ざるものを以てエピキユリアンストイック並にプレトーの主義を合一せる倫理を創刱したり

以上余は基督教が其起り來れる時代と場所に於て其宗教並に哲學の粹を集めたることを論述せしが吾人の基督教中に認むる所のものは單に是等のものゝみに止まらざるなり深邃なる印度の宗教哲學も緻密なる羅馬の法律思想も其他希臘の審美猶太の神政バーシーの罪の說又佛教の慈悲儒教の仁義一として其眞性を基督教中に代表せざるはなし而して是等のもの皆基督の中に親和化合し以て基督教の新思想を構成するものなり單に是等の諸原素を摘拔採集して一處に混合したりとて基督教の活組織を見るに至らざると猶生活体を組成すべき諸原素を悉皆集聚なしたりとて吾人は一の小動物だも製造し能はざるが如し縱令基督はパウルの謂へる如く羅馬より希臘より又猶太よ

り須要なる宗教の諸原素を採摘せしもなす也是等のものは其儘基督の心中に存在せざりしと明白なり基督の心性は猶万種の食物を消化して血液を製造する生理機能の如く是等の宗教原素を抱和化合して一種の新しき基督教思想を經緯せるものなり余が前に哲理より大なる者基督の中に存すと曰ひしは是れ彼の中に在る至大至妙なる心性を謂へるものなり而して吾人は其絶大なる心性より啓發する教訓事業か知らす識らす万國に於ける諸宗教の秀美を其中に蒐め得たるとを判斷せさる可らず

第七　基督教は信仰を以て吾人を義たらしむるとセミチック人種の特徴を以て印基督教の生地たる猶太はせられたる宗教の國にして其人民は古昔より宗教心の顧著なる發達を以て稱せられ、高貴なる道德の大法を神より與へられ而して神の撰民と呼はれたり彼等の中に神なる觀念が如何に成熟し來りたる乎聖義なる思想が如何に神より教へられたる乎彼等は又如何に仁慈なる神の攝理中に養護られたる乎吾人は之を舊約聖書に就て知悉すると

を得るものなり抑も舊約聖書なるものは神の摩西に訓示し給ひたる十誡を精神となせるものにて「凡ての神の誡を常に行ふ者は其祝福を享くる」なる神の契約を保有するものなり而して其摩西の十誡なるものは實に左の如くなりき

一　なんぢわが前にわれの外神ありとすべからず。

二　なんぢのために偶像また上は天、下は地、あるひは地

の下の水の中にあるすべての物の形を造るなかれ
此等にひれふし又つかふることなかれそはわれエホバなんぢの神は妬む神にしてわれを惡むものには父の罪を子三四代に至るまで罰しわれを愛みわが法律を守るものには千代に至るまで恩をあたふればなり

三　なんぢの神エホバの名を妄にいふこと勿かれそはエホバはその名をみだりにいふものを罪なしとせざればなり

四　安息日を忘れずしてこれを聖日とせよ六日の間はたらきてすべてなんぢの業をなすべし七日目はなんぢの神エホバの安息なればなんぢすべての業をなすこと勿かれなんぢの子息女子下僕下婢獸および門内にある旅人もまた然なりそはエホバ六日の間天と地と海とその中にあるすべての物をつくりて七日目に休みたればなり故にエホバ安息日を祝ひてこれを聖日とせり

五　なんぢの父と母とを敬へなんぢの神エホバのなんぢに賜ひたる地の上におゐてなんぢの命を永からしめんが爲なり

六　殺すこと勿かれ

七　姦淫すること勿かれ

八　盜むこと勿かれ

九　隣人について僞の證據を立ること勿かれ

十　隣人の家を貪ることと勿かれ隣人の妻とその下僕下婢牛驢馬またすべて隣人の物を貪ることと勿かれ

試に彼等は是等の神誡を實行し得たるや否やと問ふに是等の律法は靈なるも彼等は肉なる者にして罪の下に在りしかば彼等を活さん爲の此神の誡は反て彼等を罪に定め死に付す爲のものとなれり此に於て彼等は之を實行することを學はん爲めに更に多くの律令を要したり然れとも彼等は尚は其律令すら守ると能はざりしを以て更に律令に律令を加へ終に彼等の飲食起臥應對悉く法式の拘束する所となり人をして彼等は律法の爲に活くるか抑〻律法は彼等の爲に設けられたるかを疑惑せしむるに至れり然れとも是等万般の禮法も一の効果を奏することなく彼等は愈

々形式に馳せ虚禮に流れ道心日に衰へ德行日に廢るの勢なりしなり「義の律法を追求めし」イスラヘルは義の律法に追及ざりき」なる保羅の言は眞に之を謂ふものなり時に耶蘇基督は彼等の俟ち望みたるメッシアとして彼等の中に現はれたれは彼等は乃ち想へり更に嚴肅なる禮法を基督に於て觀るべし更に精緻なる律法の議論を彼に聞くへしと然れとも基督は敎へて曰く

期は滿てり神の國は近つけり爾曹悔改めて福音を信せよ心の貧き者は福なり天國は即ち其人の有なれば也哀む者は福なり其人は安慰を得べければ也柔和なる者は福なり其人は地を嗣ぐことを得べければ也饑渴ごとく義を慕ふ者は福なり其人は飽ことを得べければ也と

又基督は祈禱を教へて曰く

爾曹かく祈るべし天に在ます我儕の父よ願くは爾名を尊崇させ給へ爾國を臨らせ給へ爾旨の天に成如く地にも成せ給へ我儕の日用の糧を今日も與へたまへ我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く我儕の罪をも免したまへ我儕を試探に遇せず惡より救出し給へ國と權と榮は爾の窮なく有ちたまふ所なりアーメン

如斯基督の說く所は信仰の道にして律法の議論に非さりしかは彼等は大に疑惑したり或者は曰く基督は摩西の律法を全廢する者なりと又或者者は曰く是れ新たに律法を立つる者なりと然るに基督は此二者に對へて曰く

われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れわれ來

りて之を廢るに非ず成就せん爲なりと

是れ基督が信仰の道を以て律法の目的を成就することを謂ふものなり基督の世に携へ來りし神の契約は即ち此信仰の道にして基督を信ずる者は救はるべしなる神の約束を保有するものなり是れ上に記せる凡ての律法を常に行ふ者は神の祝福を享くなる契約に對して新約たるなり此新約や實に基督教の万民の爲に福音たる所以にして保羅の所謂律法の義を追ひ求めざる異邦人が義に追及するの道なり

夫れ義の律法を追ひ求めしイスラヘルは義の律法に追ひ及かず義を追求めざる異邦人は義を得るに至ること其理解すべからざる如しと雖ども保羅は其意を解明して曰く

彼等は(イスラヘル)信仰に由らず行に由て追求めんとせしはどに躓石に躓たればなりと蓋し彼等の基督を信するとなかりしを謂ふものなり余は今例を引て之を説かん茲に英文法の要理を知悉し其法則を全く會得したる者ありとするも彼豈英文學を修めたる者ならんや彼は未だミルトン、シェークスピーアを誦まざるものなり蓋し耶蘇基督は聖義を教ゆる宗教學のミルトンにして善美を教ゆる倫理學のシェークスピーアたれば基督を識らざる者誰か宗教道德の大法に通ずる者と謂ふを得ん是れ基督を信せざるイスラヘルが如何に嚴正なる律法に通するも未た其義に追及すると能はざりし所以にあらずや之に反して能くミルトン、シェークスピーアの妙味を翫索する者は文法を學ばずと

雖も既に英文學の要領を得たる者なり斯の如く基督を信する異邦人はイスラヘルの律法を辨知せざるも既に律法の義に追及せると謂ふへし而してミルトン、シェークスピーアを解するに文法の必要なる如く基督を信するには先づ律法の訓示する所を學ばさるべからす是れ保羅が律法を以て「我儕を基督に導く師傅」なりと解釋せし所以なり吾人眞に基督を信せば全く神を信するに至り全く神を信するに至れは隨て其律法を愛するに至る而して其律法を愛する者はよく其深意を解明し得て之れを實行し得るものなり是れ基督の所謂信仰を以て律法を成就せしむるものなり文法のみを以て足れりとする者は未た共に文學を語るに

足らざるなり斯の如く良心の律法勸善懲惡の教法に甘んじて耶蘇基督の福音を拒絶する者は未た共に義を語るに足らざるなり苟も宗教道德に心ある我邦の志士は此點に一顧して大に悟る所なかるべからず彼等の喋々喃々基督教を非難する所以のものは他なし基督の精神即ち吾律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿れ吾來りて之を廢るに非す成就せん爲なり」なる基督の精神を看破し能はざる所あるが爲なり吾人は進て言はんとす我邦に善き良心美はしき習致高遠なる宗教あればこそ基督教を要すること殊に切なりと如何んとなれば是れ新約の基督は常に舊約の摩西を完全にすべきものなればなり

基督教は神の實在を論せず勸善懲惡を講せず又單に神に

祈ることをも教へしをなし蓋し是等皆舊約の教にして信仰を以て律法を成就する基督教の本分にあらざればなり

第八　基督は已を神と等しき者なりと公言せしこと

猶太の教師一たび口を啓けは必らず律法を論じ遺傳舊例を唱へしに基督は獨り已の識見を以て教權を作り教へて曰く「吾爾曹に告けん」と又曰く天地は廢らん左れど我道は失せじと斯の如く基督は絶大なる權力を以て垂教し常に已を以て教より大なる者となし已を以て古今の聖賢に勝れ者となせり是のみならず基督は自ら神威を有せることを公言せしは單に引證を馬太傳に求むるも既に斑々之を示すものあり吾人寧そ他の三福音書を挨つて之を證明することをせんや

馬太傳廿六章は明に基督が活神に誓ふて己を神の子なりと公言せし事を錄せり請ふ之を左に摘載せん

イエスを執たる者これを曳て學者と長老の集れる所の祭司の長カヤパに携へゆく祭司の長等および長老すべての議員ともにイエスを殺さんとして妄證を求れども得ず多の妄りの證者きたれども亦得ず後また妄りの證者二人來りて曰けるはこの人曩に言ることあり我よく神の殿を毀ちて三日の内に之を建うへしと祭司の長たちてイエスに曰けるは爾こたふる言なき乎この人々の爾に立る證據は如何イエス默念たり祭司の長こたへて彼に曰けるは爾キリスト神の子なるか我なんぢを活神に誓せて之を告しめんイエス彼に曰けるは爾が言へる如し且われ爾曹に告ん此のち人の子大權の右に坐し天の雲に乘て來るを爾曹みるべし是に於て祭司の長その衣を裂て曰けるは此人は褻瀆ごとを言り何ぞ外に證據を求めんや爾曹も今その褻瀆たることを聞くなんぢら如何おもふやかれ等答へて曰けるは彼は死に當れり

又其廿七章に曰く

彼等ゴルゴタ譯ば即ち髑髏と云る處に來りイエスを十字架を釘く兵卒こゝに坐してイエスを守れりまた罪標に此はユダヤ人の王イエスなりと書して其首の上に置り其とき二人の盜賊イエスと偕に一人は其右一人は其左に十字架に釘らる往來の者イエスを詈り首を搖て曰けるは殿を毀ちて三日に之を建る者よ自己を救へ爾も

じ神の子ならば十字架より下よ祭司の長學者長老も亦おなじく嘲弄して曰けるは人を救て已が身を救ひあたはず若しイスラエルの王たらば今十字架より下るべし然ば我儕かれを信せん彼は神に依頼めり神若し彼を愛しまば今救ふべし蓋かれ我は神の子なりと云し也同に十字架に釘られたる盗賊も同くイエスを詈れり

是等の記錄に據て之を觀るに基督が學者長老又一般の人に嘲弄せられ迫害せられ終に十字架に釘せられたる原因は一に基督が彼等の所謂褻瀆するを曰ひて已を神の子なりと呼び已を以て神と等しき者となせるにありしのみ

又基督は吾人に教へて「我儕に罪を犯す者を我ゆるす如く我儕の罪をも赦し給へ」と祈らしむるに彼自身は貴て赦罪

を神に祈りたる跡なし又基督は吾人を戒しめて曰く「人の罪を定ると勿れ恐くは爾曹も亦罪に定られんなんぢ兄弟の目にある物屑を視て已が目にある梁木を知ざるは何そや」と然るに基督自身は万民を罪に定めて已れ一人を「活神の子キリスト(神に任せられて救主たる者)」と呼へり而して彼は又人の已を「主よ主よ」と呼ふことを禁せざりき蓋し猶太に於て「主」なる言辞は特に神を呼ぶに用うるものなれば基督は正しく已を神よと呼ふことを許したるものなり

偖基督は已に就て斯の如く自言し斯の如く自身を普通の人類と區別したるを以て吾人は究察せざるべからず彼は果して自ら其公言せし所を信せし乎將た又其言ふ所已を欺き人を欺けるものなる乎否を

凡そ人其自身に關して言ふ所の眞實なるや否は其人の性格に徵して斷定せざるべからず故に基督は果して自ら已の神の子なるを信して其信する所を發表せるものなるや否吾人は之を基督の品性に徵して知らざるべからす然れども高潔なる靈性を具へ壯大なる德化を世界に布きし基督にして故意に已を欺き人を欺きしとありしとは吾人の想像し能はさる所なり視よ保羅を初め凡ての便徒等は其言ふ所を信して彼を神の如く崇敬し猶太の歷史家ジョセフアスも「若し基督を人と呼んで可なりとせば」と云へるに非ずや基督の高貴なる品性は敵も味方も同しく承認する所なり嗚呼ミルの所謂「人間の模範」ルーソーの所謂「神の子らしく世を逝れる基督」にして果して已を欺き世を欺ける

僞善者なりとせん乎是れ決して吾人の信し能はさる所なり夫れ已の足らざるを知る者こそ已を識れる者にして愈〻神に近づけは益〻已の神に遠きを悟ること吾人の常態なるに基督は已を人類に超絶せる神の子なりと公言して憚る所なかりき且つ又た已の神と位を仝ふせんことを求むる者は狂愚の人なるを証する者なり是等の理に由て吾人は必ずや承認せざるを得ず基督は其明に且つ公に言ひし如く自ら神の子たるを信せしことを而して又其信せし如く實に彼は神の子たりしことを

基督の基督教に於ける關係は孔子の儒教に於ける又佛者の佛教に於けるが如くならす基督は基督教の生命にして基督なき基督教は死物なり而るに儒佛の二教は教祖なき

も自ら眞理の故を以て世に立つ者なり斯の如く基督教外の凡ての宗教に於ては教祖と眞理と互に分立する所之れあるも基督教に於ては然らず基督は即ち眞理眞理は即ち基督なり是れ基督教が基督なくして世に生存し能はざる所以にして抑も亦基督が其教に依るとよりは寧ろ己を信するとを其弟子に勤め給ひし所以なり

之を要するに基督教の最大特性なるものは基督の本我なる觀念にして己の神と同等なるとを直覺し奇蹟を行ひ又人の罪を赦す所の權能を有し凡ての神の律法を成就して己先づ活ける律法となり以て己を信する者を救ふとを其任務とするものなり

第三　基督教の感化

以上說く所の基督教の起原並に特性より推測するも基督教感化の如何に高大なるべきやを察知するに足れり然れども千八百有余年の久しきに亘る基督教の實際歷史は吾人の想像に勝りて其教化の大なるを證明せるものなり乃ち一個人に於ける「拯救の經驗」は直接に之を證し一國に於ける「文明の事實」は間接に之を明にするものなり余は先づ基督教會の歷史に照して之を叙せんとす

基督教會の歷史は基督の直接なる薰陶を被むれる使徒を以て始むるものなり基督は學問を以て門弟を集むることをせざりしゆへに基督の最初の使徒なるものは皆無智無力の徒なりしのみ、ガリラヤ湖邊に住する貧窶なる漁人に非ざれば酷虐無法なる稅吏の輩なりしなり是を以て「基督

の死は基督教の死ならん」とは當時に於ける天下一般の預想なりしに豈圖らんや彼等は基督の死後に至り泰然として其信佛を維持せしのみならず奮然として進み基督の磔死せられしエルサレムを始めユダヤ全國サマリヤを巡遊して基督を磔刑に付けし猶太人の罪を痛責し基督は神より來れる救主なることを說き以て彼等の悔改信仰を喚起せり而して彼等の說敎を聞きし聽衆は其權威ある直言に心を刺され悔改めて基督を信ずる者幾千の多きを數ふるに至れり其使徒等は或は學者に難詰せられ或は公官に裁判せられ又或は一般の人士に迫害せられたりと雖も「我等見し所聽きし所のものは言はざるを得ざるなり」と斷言して進み常に基督の爲めに害むことを以て己の光榮となし

已を詛ふ者を祝し迫害者の爲めに祈禱し三十年乃至五十年に亘りし彼等の生涯中終始一貫凜然犯すべからざるの信仰を抱有せしは實に勇壯なる基督敎化を被むれる實證なりき

又彼等の靈性は「基督に充滿たる其中より受けて恩寵に恩寵を加へられ」如何に高大なる發達をなしたりしか吾人は彼等の諸敎會に贈れる文書を誦み其中に煥發せる彼等の高潔なる德性に徵して容易に之を推判し得るものなり彼等の文書は單に聖賢の遺書として敬愛せらるゝのみならず神の書物として崇敬せらるゝなり

嗚呼ガリラヤの漁夫稅吏の諸輩が一朝悔ひ改めて基督を信じたれば遂に斯の如きを得るに至りたる乎基督敎化の

洪大なる豈驚嘆せざるを得んや施洗禮のヨハネの所謂神は能くこの石をもアブラハムの子と爲しめ給ふとは夫れ是の謂ひ乎

基督の死後凡そ七年當時基督教徒の大敵たりし保羅の突然悔改せし事蹟あり是れ基督教の感化を論んずるに當り言はざるを得ざる一事實にして基督教の尤も堅固なる證據論は保羅悔改論なりと謂ふて可なるべし彼の種屬を問はゞ是れ純然たる猶太人にして彼の信ぜし宗教は猶太教の尤も峻嚴なるパリサイ宗なりし而して彼の熱心なりしとは基督教徒を窘逐殺戮せし事實によりて明かなり彼の心事は正大彼の學問は宏博、彼の目的は尊貴、彼の操行は嚴正なりし而るに彼ダマスコにある基督教徒を殺害せんとして

て往き途に偶〻天光に環照せられ基督の聲に召呼せられ地に仆れて罪を悔ひ基督の名を呼んで「主よ我に何を爲さしめんとし給ふや」と號呼せり横井時雄君保羅の悔改を叙述して曰く(基督教新論八十二葉)

曩に彼れ未だキリストに從はざりし中は自尊自負自義自賛の精神其胸中に充ち滿てり神に對して熱心ならざりしに非ず倫理の道に明かならざりしに非ず品行端正志氣慷慨ならざりしに非ず然れども其思想の中心は即ち己れ自身にして其神に盡し人に盡さんとせし所悉く終に自己の私に陷れり然れども一旦基督の信仰彼が胸中に生せしや否や彼は全く一新したる人物となれり夫れキリストの道を迫害せし者が變じてキリストの傳道

者となりし事は大變化なりしに相違なし然れどもこれ只外形上の變化たりしに過ぎず彼が人物の一心とは彼が心志の一新を云ふなりパウロは相變らず神に對して熱心にして倫理の道に明白なりき其品行端正にして慷慨雄壯の人たりき然れども其心志の方針に至りては實に天地の相異ありしなり彼れが先きに依頼せし自己は死してキリスト之に代りて生き彼の私心去りてキリストの心入り來れり仁愛謙遜温柔平和喜悦の聖氣は霭然たる春風の如く天より吹き來りて彼が胸中に充滿せり其狀や宛も窮陰殺々の嚴寒の候時去りて陽氣生々花開き薫滿つる春日の來るが如くなりき

保羅の悔改は福音主義に反對せるパウルカイムも承認せざるを得ずと爲せし歴史上の事實にして顯著なる基督教の感化力を証明するものなり彼基督を識るに至れる歡喜を言ひ顯して曰く

吾我主キリストイエスを識るを以て最も益れる事とするか故に凡てのものを損とす我彼の爲に既に是等の凡てのものを損せしかど之を糞土の如く意へり

と而して彼は常に基督を崇めて已の心の王となし己を以て「罪人の首」「尤も微きものより微き者」と考へたり「我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生るに非ずキリスト我に在て生るなりなる彼の言はよく其心情を言ひ顯はせるものなり

偖てパウロの被むるキリスト教化なるものは唯其悔改の

一事實となりて了れるものに非ず熱心なる傳道の事業となりて其一生を貫きたり其初め彼が「天の現示に背かず」してキリストの僕となるや「直ちに會堂」に於てイエスの事を宣て即ち此は神の子なりと言ひ」ダマスコの市民をして駭然たらしめたり其後エルサレムに移り終にユダヤの全地を廻りて基督の福音を宣傳し更に一轉して異邦人に到り「罪を悔ゆべきこと神に歸すべきこと」を敎へたり彼が千難万苦を破りよく其傳道の天職を全ふしたる其功勞は僅々二三十年間の短日月に於て羅馬の天下到る處基督敎徒の足跡あらざるなきに至らしめたる事實に由て顯然たり

彼れ其傳道の勞苦を叙述して曰く

われ勞苦し(はたらき)と彼等(基督の最初の使徒)より多く鞭(むち)たれしと彼等より夥しく獄に入れらるゝこと多く死に遭ふこと屢々なり又われは五次ユダヤ人に四十に一を減じたる鞭を受け三たび條(えだ)にて撲れ一次石にて擊れ三たび破船にあひ一晝夜海にあり又屢々旅路を經海中の難僞の兄弟の中の難に遭へり又彼等に愈(まさり)て勞苦つかれ屢〻寢(ねむら)ず飢渴屢〻食を絶ち凍裸なりし也此に言ざる外の事ありて日々我に迫る即ち諸の敎會の憂慮なり　(可林多後書十一章)

と彼は基督を說く爲めに自ら斯の如き患苦を其身に惹起せり然れども彼は尙ほ「福音を宣へ傳へずば實に禍なり」と思ひ「若し好て之を行ば賞を得ん若し好ざるも其責任は彼に與れること」を確信したり而して彼は彼を愛める者に賴り凡て是等の患難に勝ち得て餘あるを證し天上天下何れの

處にもイエスキリストに賴れる神の愛より彼を絶らする者之れなきことを明言せり加之ならず彼は其艱難中に在りて欣悅滿々凡ての患難中に我に慰滿ち悅餘あり」と云へり斯の如く彼は万死を冒して基督の爲めに忠勤しよく其天職を保守して己に托せられたる傳道の工事を大成せり歐米に於ける基督教會の基礎は實に彼の手に賴て置かれたるものなり吾人は彼保羅一生の事業に及ぼせる基督教の活力を視其感化高大なるに感嘆せずんばあらず又彼が諸教會に贈れる文書を讀む者誰乎其熱心なる愛に感動せざる者あらんや吾人は之を誦む毎に彼の胸裡に包まれたる愛心の結晶は如何に皎潔美麗なるかを想はざるを得ず彼コリンタ人の教會に語つて曰く

「我いよ〳〵爾曹を愛すれば愈々爾曹に愛せられず然ども欣びて爾曹の靈魂の爲めに財を費し身を盡すべし」と

又ピリピ人に贈れる書に曰く

爾曹の信仰を供物として献んには假ひ我血を流して澆ぐとも吾之を喜ばん爾曹衆の人と共に喜ばん

又テサロニケ人に向ては曰く

吾爾曹を慕ひて第に神の福音のみならず已の生命をも爾曹に與へんとを喜べり是れ爾曹は我愛する者なれば也」と

更に又羅馬の教會に語て曰く

若しわが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沉淪に至らんも亦わが願なりと

嗚呼博學長善なる保羅ですら尙は且つ基督の光に已を照し視る時は罪人の首たるを認識せざるを得ざりし乎自己の改新を神に祈らざるを得ざりし乎而して又彼ハ畢生基督の奴僕たるを甘んじ其使命を全ふする爲めに果して其身命を忘れたる乎基督教が非常なる德義の感化力を具ふると是に由て大に之を觀るへし

さて斯の如き基督教の感化は使徒の時代より今日に至るまで苟くも基督教徒となれる者の皆多少經驗せる所にして基督教會は此教化を以て神の聖靈の恩化たることを信じ罪の赦心の更生、神の子となること、永遠の生命に入ること、を以て抽象的に之を言ひ顯はせり、約言せは吾人は基督に賴りて光明恩愛及び生命の賜を辱ふするものなり是を之れ

一個人に於ける基督教の感化となす

基督教の社會に及ぼせる感化にして世人の熟知せる所の者は婦人の位置を進め又奴隷の弊風を制止せし事蹟並に基督教が如何に歐米社會の全体を改良し其美術文學を進歩せしめたるかの點なり然れども余は茲に之を細論するの要なきを以て是れより歐米の文明は基督教の恩化なることを概論せん然れども余は今日歐米の文明を以て單に基督教の賜とは謂はず只文明の事實が基督教と共に手を携て歷史の舞臺に現はれ來れる事實より推さば基督教の恩化は正しく文明の原由となりしとあるべく否らざるも是が爲めに保姆の任に當れるとありしを辯明せんと欲す現時の文明は單に人種の特質地勢の利を以て說明し得べ

きものに非ず如何となれば之をアリアン人種の特有せる進歩的品性に歸せんとするも亞細亞に居住する同人種ペルシャ印度は此文明に後れたる事實あるを奈何せん之を地味天候或は他の地勢に歸せんとするも那威日耳曼英國露西亞皆同じき經緯の地理を有して千古變らざるなり而して基督教の入れるまでは何處も同じ秋の夕暮にて文明の春色を見受けざりしは抑々何の理ぞ余輩は此に於て文明の原由は人種地勢に在て存せず基督教に在て之れあるとを判定せざるを得ず

今日歐米の文明なるものは日耳曼人が基督教と共に古昔羅馬文明の遺物を繼承して佛國人が之を布衍せしものなるに外ならず而して其人道を貴重し自由を愛好し德義を尊尚するに至りたるは是れ基督教の賜にして余輩曾て之を羅馬文明の遺物中に見ざる所なり

試みに基督教の起りし時代羅馬の事情如何にありしかを一顧せよ余輩は保羅の羅馬書一章に於て其腐敗せる心膓の分析表を一覽せざるもストイックの哲學者セヲカの記錄せる所に據り風俗懷亂の狀眞に恐るべきものありたるを知るなり當時の哲學は國民の豪奢を制する効なく宗教は其汚惡を抑壓する力なかりき而るに基督教は此德義なく文化なく公利公福の爲めにする勞働なき羅馬の天下に立ち至善至美なる愛の道義を說き至高至大なる眞理の自由を論じ完全無缺なる神の奧義を宣べ以て其盡たり光たるの本分を全ふせり是れ基督教が今日の文明を興した

る最初の原因として數へらるゝ所以なり又其文明が日耳曼人の手に遷移せし以來基督教は恒に國民の仁愛を勸起し貧羸を保庇し不幸を扶助せしことは今日歐米の文明の爲めに滿々たる源泉なりき

若し夫れ一國の文明なる語は其國少數の人の智德を謂ふの義なりとせば基督教を以て文明に關係なしと云ふも可なり然れども若しダンテの解釋せし如く「文明を以て人間惣体に潛伏せる一切の智力を思想に喚起し次に之を行爲に發表するの謂ひなり」とせば基督教は恒に是が保姆の任に當り其發揚を贊けざる可らざると明かなり基督教は人間惣体を携へて善美の世界に入り完全なる天父の下に吾人は互に兄弟たることを教ゆるものなり

又文明なる語は單に社會の物質的改良を意味するなりとせば文明を以て基督教に負ふ所なしとなすも可なり然れども若し文明なる語はコングリーブの解釋せし如く「公衆の爲めに自己を犧牲にすること」を意味するか又プリッチの謂へる如く「高貴なる品性より自然に發する所の自由」なりとなすか將た又コントの說きし如く「本分の念と幸福の心との嬶和を意味するなりとなさば吾人はブルクと共に文明が永遠基督教に依從せざるべからざることを斷定せざるを得ず如何となれば基督教は啻に吾人に眞正なる仁愛眞正なる自由眞正なる本分幸福を教ゆるのみならず吾人を驅て是に到らしむるの神の大能なればなり

第四　基督教現今の大勢

第十九世紀に於ける基督教の大勢は宣教の大事實として現はれたり是れ強壯なる基督教感化の外に發せるものと謂ふべし今余は左に其大勢の一斑を掲げん

(一)亞弗利加に於て初めて傳道の網を下したるはデビッドリビングストーンにして彼の同地に達せしは本世紀の初めのことなりき而るに見よ今日は七百有餘人の宣教師が歐米諸國にある三十餘の傳道會社を代表して傳道の漁業に從事し居れり而して信徒の現在數は三十万以上に達し既に内國教師七千五百の多きを出せりと云ふ

スタンレー痛くリビングストンの殊勝なる勞役に感嘆して言へることあり曰く「亞弗利加の要する所のもの又余が同國民の爲に請求する所のものは唯基督信徒の良き働き

あるのみなり」と

(二)印度に初めて傳道の鍬を入れしは夫の外國傳道の卒先者として有名なるウィルリャムケレーにして彼の同地に達せしは千七百九十三年のことなりしが彼の勇しき開拓の勞働は空しからず今日既に五十九万余の信徒あるを見るに至れり五百の外國教師五千の内國教師現に耕耘の勞を取り英國を主として歐洲の傳道會社のみが毎年印度の爲めに費す所の傳道金は實に三十万弗以上なりと云ふ

(三)支那は千八百四十三年に於て僅かに六名の基督教信徒を有せしのみなりしが今日は四万を超るに至れり

(四)緬甸の如きは一人の宣教師ヂァヤドソンの力に籍り全國既に基督教の德化に浴せりと云ふて可なるへし彼は千

八百十三年初めて同地に達し多年非常の辛苦を忍びて遂に斯の如き傳道の大功績を擧げたり彼れ本國の傳道會社に報告して曰く「今日我は基督信徒の手に耕されたる米を食ひ果を味ふことを得たり余の目の届く限り皆我兄弟の家ならざるはなし」と

(五)フィジー諸島の如きもヂエームスカルベット等の功勞に因りて今日其八十余の諸島は到る處基督信徒の住家ならざるはなきに至れり光明の使初めて該地に達せしは紀元千八百三十五年のことなりしが千八百七十四年の曉には全島治く基督教の恩化を被り人口十二萬の中十萬二千の基督信徒を見るに至れりと云ふ千八百三十五年以前に於ける同島の情狀を聞知する者誰か基督教化の偉大なる

實績に驚嘆せざるものあらんや義の大陽未だ該地の東天に昇らざる以前其土民は地球上最も暗愚なる尤も野蠻なる部落にありしことは新しき墓を發て死人の肉を食ひ又或は生体の手足を裂て其骨を啖る如き實事ありしに據て明かなり然れども今日の彼等は昔日の彼等に非ず互に隣人の親みを結び兄弟の交を誓ふ者となれり加之ならず彼等は近來自ら傳道會社を設立して數人の傳道師をニュージーランドに派遣し己の享けたる天光を彼地に反射し已の聞きたる福音を其住民に反響せしむると云ふ是れフィジーに及ぼせる基督教の感化なり

其他グリンランドボルヂオ、マダガスカル、ヂャバ、ニユージーランド、トルコ、ペルシヤ、布哇、朝鮮及びアメリカの土人の

如き皆是れ現今に於ける殷盛なる傳道の戰地にして聖書は既に三百餘種の語に飜譯せられたり

我邦の如きは殊に著しき傳道の成功を奏せし地にて小崎弘道君は今回米國に開かれたる萬國宗教會議に提出せし論文の冒頭に於てよく簡短に其要領を叙述せり故に余は今其基督教新聞記者の筆に籍りて譯せられたる者を掲げん

日本に於ける基督教の進歩は實に顯著なるものにして最初の新教宣教師が初めて日本の土を蹈みてより年を閲すること僅か三十四

最初の新教々會が初めて設立せられてより未だ辛く二十年を經過せるかせざるかの短少日月なりと雖も然れども日本には已に彼

の宣教師が七十年の間傳道し居れる土耳其よりも多くの信徒を有し又た殆ど一世紀間二倍若しくは三倍の宣教師が働き居れる支那よりも多くの自給獨立の教會あるなり日本に於ては基督教の新聞雜誌は凡て啻に名稱のみにあらず實際日本人の手に於て發行せられ又た是まで最も世に勢力を及したる基督教の書籍は殆ど皆日本人の著作或は飜譯に係らざるはなし如斯きは他の邦國に於ては殆ど未だ之を見ざる所なりとす

以上余は世界の傳道事業につき其現況の一斑を擧げ了りたれば是より基督教國の大勢を一言せざる可らず然れ共

余は多言を要せざるを知る如何となれば以上陳べ來りし傳道の形勢より推察せば吾人は歐米の基督教會に充實せる生氣滿々たる活力の存するとを辨知し得べければなり」

夫れ歐米の基督教會が今日はゞ外國傳道に熱心盡力すると余輩其例を前日の歷史に見さる所なり年々之が爲めに支出する巨万の財資と多數の生命は實に歐米に在る基督教會の健康を証するものと謂はざるを得ず「歐米の基督教は老枯せりなる或人の評説は事實に反せる妄言なり教堂の新築日に其數を增す如き神學の地位漸く高きに進む如き聖書研究の法益々精を加ふる如き何人も疑ふべからざる事實なるに非ずや然るに歐米に遊ぶの士往々其地に行はるゝ不虔不義を指點して基督教の感化取るに足るものなきを公言す然り歐米に不虔不義の行はるゝは彼の言ふ如く事實なりされども一方に敬虔正義の强き勢力あるも亦是事實なり余昨年北米より歸朝せる頃一友人に語て曰く「余は彼地に於て基督の如き人物を教會内に見受けたりしが惡魔の如き人物を教會外に認めたり」と夫れ同一の日光一方の植物に向ては生を働き一方の植物には死を働く自然の理あるを以て余は歐米にある此矛盾の事實を自ら説明し得るとを信ず余が茲に教會の内外を言ひしは固より教堂の内外に非ずして基督教化の内外を謂ふものなり」然れども吾人の茲に記臆すべきとは今日の歐米諸國が基督教國家なる吾人の理想を現實せるものに非ざるとと是れ

カノンファルラル慨嘆して言へり曰く

吾人は今日に至るまで基督の教訓を悟るの明に乏しく又其律法を守り能ふ所の實力に乏しくありたるなり又吾人の基督教國なるものは叨りに其名稱を負ふのみにして其實績の見るべきものなかりき權力法式學說自恣は基督教國の偶像にして基督教會なる至聖なる神殿に坐し神殿は是が爲めに汚され又是が爲めに人の厭惡を招くに至れり又外面の禮式律法の明文狹隘なる宗派心頑固なる神學說は信仰の大なる仇敵にてありき」と

今日歐米の基督教會は果して氏の云へるが如き憐れなる狀態なるか而して既に吾人の視察し得たる如き好果の觀るべきものこれあるか然らば則ち他日基督教が其所謂偶像なるものを変鋤して悉く歐米の人心を制服し以て基督教國なる吾人の理想を現實するに至らは其教化の深遠なる其勢力の高大なること果して如何ぞや

第五　結論

以上余は基督教の起原特性感化及び現今の大勢につき其の要領を論じ了りたれば茲に之れが前提より歸結せざるべからざる推度を下し基督教は如何なるものかの問題に答ふべし

第一　基督教は宗教なり

基督教は神の存在を論證する純正哲學に非ず善惡の理を證明する倫理學にも非ず又物質的宇宙の成立を解說する科學にも非ず乃ち純粹なる宗教を以て自ら任ずる者な

り即ち人を神に近づけ此世を神の國に改化し罪の實際を善の理想に追及せしむること是れ其本分として自ら負ふ所のものなり神神の國及び善の解釋に至つては近くは之を人類普通の感覺に訴へ遠くは之を哲學の判斷に委ね敢て自ら問ふことなし「我は律法を成就せんが爲めに來る」なる基督の言よく基督教の本職を告白するものにして抑〻亦宗教の純粹なる意味を明かにするものなり故に曰く基督教は宗教なりと

第二　基督教は全人類の宗教思想を代表するものなり

前に論じたる如く基督教は猶太人より起り希臘の文明に育てられて今日の形体を具ふるにいたれり基督教の舊約聖書が希伯來語にて錄され其新約聖書が希臘語にて著はされたる事實は既に之を吾人に證明するものなり見れ實に一はセミチック人種の宗教思想を代表し他はアリアン人種を代表するものにて萬民の父てふ神の觀念は兩方の宗教思想を聯合交和せるものなり夫れ神を渴望する人心の自然に着自して宗教に入るはセミチックの特性にして萬物の大原を探求して宗教に入るはアリアン人種の特色なり今此内界の心性外界の宇宙より湧出する全き神の思想は吾人之を基督教に於て發見す且つ基督教の根元なる猶太教の往事を察すれば埃及に往てはハム族の宗教に接觸し波斯に於てはアリアン宗教の空氣を呼吸せること歴史に照して明かなり然らば則ち基督教は全人間種属の宗教を代表す云ふも誰か以て不可となさん

第三　基督教は萬國の宗教中至高至大なる感化を社會に與ふるものなり

以上陳ぶる所の基督教の感化及び其現今の大勢は此結論の至當なるを證するものなり頃者一佛僧余に語つて曰く「基督教徒について余輩の尤も敬服する點は其傳道に熱心なるにあり」と佛者の此感を懷くは恠しむべきに非ず彼等の近來學校を設け説教會を開く如き又婦人會を起し青年會を組織する如き其他病院を立て禁酒會を設く如き善美の事業一として基督教徒の所爲に摸倣せざるはなし基督教徒均しく是れ人なるのみ而るに其私心を捨て公共の爲めに勞し私利を擲て公利を圖る事業に於て其他の宗教徒に勝る所以のものは彼等の信ずる基督教の感化に非ず

して豈他あらんや是れ即ち基督教が萬國の宗教に超絶する感化を社會に與ふる實証なり

第四　基督は神の子にして基督教は神の心なり

此結論の意を明了ならしめんが爲め先づ神及び人なる定義につき一言せざるべからず凡そ神、人、自然超自然なる語の意味は解釋するの人により淺深廣狹の差あるを免かれず無智なる人の懷ける神、超自然なる理想は智者學者の有する人自然なる理想にも及ばざるとあるべし此に於てか無知者の神と崇拜する所のものは學者の人間として比肩する所のものたるとあるべし故に是等の名稱につき各人一樣なる解釋を施すことを到底吾人の能くすべき所に非ず縱令一定の意義を付するも人によりて其解釋は區々たら

ざる可らず然れども自然と超自然神と人との關係は無智者にも智者にも無學者にも學者にも齊しく之れあるべし人間なる理想進歩せば神なる理想隨て上進するを以て如何に吾人の智識發達するも神人自然超自然の關係を吾人の心より脱却すると能はざるは明かなり吾人が基督教は神の心基督は神の子なりと斷定するも畢竟此の理に基き神は神たり人は人たるの關係あるよりして云へるなり無智者は無智者相應の解釋を以て基督を神の子と信し智者は智者相應の説明を下して基督を神の子と認む神の子なる意味に廣狹深淺の別はあれ智者も愚者も基督を神の子と認定すべきに於ては一なりとす神人なる理想進歩せば基督を識る智識も又た發達す人或は謂はん昔時は人智未

だ啓發せざるが爲め人々基督を以て神の子なりと信仰せしも開明の今日誰か基督を以て神の子と認めんやと然れども吾人の信する所に據れば以上論する如く昔人にも今人にも何時何處の人民にも基督は神の子として信憑せらるべきなり基督教の歴史は論より証據にて無智なるガリラヤ人も博學なる保羅も齋しく基督を神の子と信せり超自然の人の子と感知せしなり千八百九十年後の今日も基督の光榮は昔日に比して毫も減んせるのみならず益〻增加して基督の基督たる所以愈〻明かになれり第十九世紀に於ける哲學の方向は神靈成肉（インカネーション）の教理を排斥せずして却つて許容するの傾向あるは吾人之を前日の哲學世界に見ざる所なり且つ吾人は基督に依て初めて人らしき人神らしき神

なる理想を發達し得るものなれば吾人の心性發育するに隨ひ益々基督の眞意を了解するに至るものなり例えば嬰兒が其父を辨識するが如し始めは其手腕の大なるを視て父の腕力如何に壯んなるを知るも漸く成長するに隨ひ其心情思考を辨知するに至る斯の如く昔時の猶太人は一般に基督の手腕即ち奇蹟を行ふ能力を認めんことを求め正しく之を認めて基督を信じたり而るに保羅の如き又約翰傳記者の如き一層發育せる心性を有するものは一層基督の基督らしき所を親知して基督を信じたるなり保羅哥林(コリン)多人に語つて曰く「我爾曹に語れるとき基督にをる赤子に語る如くせり我爾曹に乳を哺しめて堅き物を與ざりき爾曹食ふこと能はざればなり」と是れ保羅が哥林多人の信仰

鈍く理想卑きが爲めにキリストに在る高尚なる靈理を語り得べからざることを慨する言なり基督自ら弟子に語て曰く

「吾なは爾曹に多く語るべきことあれども今なんぢら曉ることを得ず然れど彼即ち眞理の靈の來らんとき爾曹を導て凡ての眞理を知しむべし彼わが榮を顯さん蓋わが屬(もの)を受て爾曹に示せばなり」と

以上述ぶる所を概言すれば吾人の信じて基督を神の子超自然の者神の化身と辨識するところの知識は心性の發育するに及んで廢るべきものならず益々成長して高尚に進むものなると是れなり

偖吾人は何故に基督を神の子と信ずるや是れ實に問はざ

るを得ざる問題なり此大問題に對して答ふべき所甚だ多しと雖も吾人は左に掲くる所の簡短なる二樣の答辯を以て足れりと信ず

（甲）

第一　基督の使徒等は基督を神と等しき者と信せり

第二　基督は使徒等の已を斯く信ずるとを知りて彼等を禁せざりしのみならず却て彼等の信仰を嘉したり加之基督は自ら已を神の子と呼び已の神と等しき者なることを彼等に敎へたり

第三　基督は自ら其敎ゆる所を信じ已の神と等しき者なるとの直覺を有せり

第四　己の神と等しき者なることの直覺を有する者は

狂人に非ざれば神なり

第五、　基督は狂人に非ず

第六、　故に基督は神なり

又吾人は基督に就き左の如く論結するを得べし

（乙）

第一　前條論ぜし所の基督敎現今の大勢感化特性並に其起原は吾人をして基督の聖善なる靈性を有し給へることと並に其甦り給へることの事實なることを信せしむ

第二　夫れ聖善なる靈性と甦生は超自然の現象なり

第三　基督は是れなり

第四　故に基督は超自然なり

余は之を保羅に學びたり保羅羅馬書一章三四の兩節に錄

じて曰く

彼は(基督を指す)肉体に由ばダビデの裔より生れ聖善の霊性に由ば甦りし事によりて明かに神の子たること顕れたり」

又同書第九章五節に曰く

「肉体に因て言ばキリストも亦彼等より出かれは萬物の上に在て世々讃美を得べき神なりアーメン」と

余は今十分に本文の字義を解説する暇を有せずと雖も讀者の爲に一言の説明なかるべからず一章三四節中に在る「由れば」なる原語は九章五節中の「因て言ば」なる原語と全く同じ而して聖善の霊性とは基督の有せる心事の性質を明言せるものにて「明かに」なる原語の意味は「權力を以て」と直

譯すべし而して「顕れたり」なる原語は區別とか顕著とかの重き意味を有する言辭なり故に保羅の意を解説せば保羅は第一に基督の心性の聖善なることを認めたり而して更に判別して基督を神の子なりと斷定せしは甦生を以て印せる事蹟あるに基因せしなり尚は綴密に本文の意を究察すれば保羅は基督の聖善なる心性が顕著なる大能を有し甦生の事實となりて出現せるとを信せるものなり故に斯の如く保羅の信念を分析して其極處に達すれば基督の甦生を其聖善なる心性の表現となし基督の心性を以て唯一なる超自然の現象となしたること明白なり而して是れより彼は基督の神の子たるとを判斷して羅馬書第九章五節に言へる如く「彼は萬物の上に在て世々讃美を得べき神な

りアーメン」と告白せり保羅が基督につき透明なる言辞により精確なる識見を發表せると茲に至りて明かなり

余輩論じて此に至れば讀者は既に悟了せらるべし基督の神の子なるや否の問題は基督が超自然の心性即ち聖善の靈性を具へ給ふや否の問題によりて決斷せらるゝことを吾人は繰り返して曰はん基督教の起原特性感化及び現今の大勢は基督が超自然なる靈性を備へ給ふ大事實あるに非んば到底他に適當なる説明を得ざることを

基督既に神の子たれば基督教が神の子たると隨て明かなり余は基督教のみ神の心を有し他の宗教には全く是れなしと言ふに非ず只特殊の意味に於て基督教は至大至高なる神の心事を發表せるとを謂ふものなり聖書に曰く

「神昔は多の區別をなし多の方をもて預言者により列祖に告給ひしがこの末日には其子に託て我等に告げたまへり彼は神の榮の光輝其質の眞像なり」と

第五　基督教は万民を罪より救ふ神の大能なり

人間の學ぶ凡ての學問は其科學たると哲學たるとを問はず余輩の手を引て善又は神なる問題に立ち入らしむ而るに基督教は論議の場裡を遠く離れて吾人を神聖なる堂に移し吾人をして義の前神の前基督の前に立たしむ是より於て吾人は初めて已れの如何に邪惡なるか如何に神の前に罪障あるかを認め「主よ赦し給へ吾は罪人の首長なり」と號叫す此時一聲忽ち耳に響くあり「小子よ心安かれ爾の罪赦されたり」と是れ主の言なり吾人之を聞て大に悅び對へて

曰く「我身我靈茲にあり主よ我に何を行しめんとし給ふや」主曰く「爾曹を召給ふ聖者に效て凡ての行を潔すべし」なんぢら愛せらるゝ兒女の如く神に效ふべし」と此に於て吾人は初めて眞理の温顏を仰ぎ神の仁慈救主の恩惠を悟り後に在るものを忘れ前に在るものを望み遂に慾の敗壞を脫れ神の性質を享有するに至る是れ所謂基督教の救拯なり。

神の子主耶蘇基督の世に携帶し來れる基督教は斯の如く吾人を罪より救ふ所の神の大能なり夫れ神の大能は罪ある吾人を滅さん爲に表現せず却て吾人を救はん爲に來れり吾人豈神の恩愛を感謝せざるを得んや

宜なり使徒保羅が「我は福音を恥とせず此福音はユダヤ人を始めキリシヤ人凡て信ずる者を救んとの神の大能なり

我はキリシヤ人及び異邦人また智人および愚人にも負へる所あり」と云ひしは吾人も亦我同胞四千有餘萬の爲め保羅の精神保羅の責任を抱負せざるを得ざるなり。

基督教一班終

明治廿七年二月十五日印刷
仝　年仝月十九日發行

發行兼編輯者　小林光茂
本郷區四片町十番地
にノ四十八號
著作者
印刷者　平島曠
日本橋區上槇町十六番地
印刷所　八重洲橋活版所
日本橋區上槇町十六番地
發行所　メソヂスト出版舍
東京京橋區銀座三丁目八番地
發賣所　警醒社書店
同區出雲町
同　池田榮進館
同區銀座二丁目六番地

版權所有

小林光茂君編

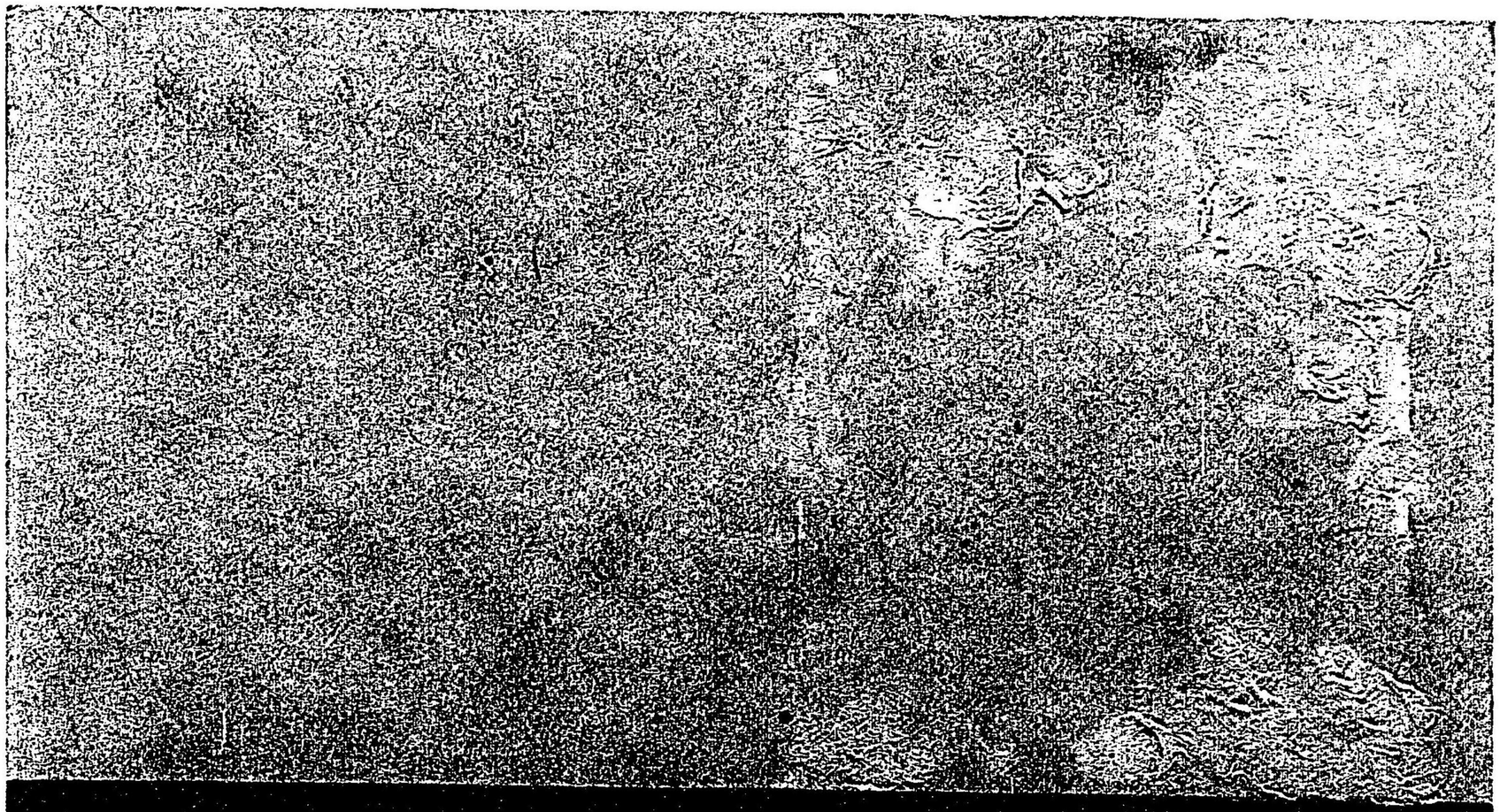
眞理の叢

紙員百五十八頁
定價十二錢
郵稅四錢

此書は左の順序を追ふて基督教の眞理を平易明瞭に解明せる所のものにして道を求むる者には最も良好なる餘師なり

目次
- 神宗教の中心點　原田助君　聖書
- 基督教の仁愛　横井時雄君　基督教の起原
- 實在的幷理想的人生　原野彦太郎君　耶蘇基督　コーリッ君
- 希望　小澤孫太郎君　聖靈　小林光茂君
- 丹羽清次郎君　安心　本多庸一君
- 外山孝平君　イビー君

發行所　メソヂスト出版舍　京橋區銀座三丁目八番地
發賣所　警醒社書店　京橋區出雲町
仝　池田榮進館　京橋區銀座二丁目



特61
267

基督教一斑

国立国会図書館

020427-000-3

特61-267

基督教一斑

小林　光茂／著

M27

ABI-0236